

大正の後期に於て、歐洲心理學界の基調に一轉化を見るに至つた。即ち、自然科學的より精神科學的に、又は經驗的實驗的より體驗的に變化して來た。そして其の影響は勿論我が國の心理學界にも及んだ。即ち、大正十四年に所謂「形態心理學」が移植され、やがて精神科學的心理學乃至了解心理學や現象學的心理學等も亦相踵いで輸入され、且研究し應用され、斯くして次第に著者のいふ學的又は統一學的になり、以て今日に至つた。

此の他、傍系として、異常心理の研究と應用も亦多年に亘つて行はれて來たが、其の成果は正常心理學に比して一籌を輸するものがあるのは萬止むを得ない。其の中で特に記すべきものは、大正の初年頃、福來友吉氏等が力を注いだ催眠心理學、寺田精一、小熊虎之助氏等の犯罪心理學、性的心理學就中變態性慾乃至天才心理學等の研究であり、更に、民族心理學や群集心理學や藝術心理學やの特殊心理學等も、それぞれ或程度迄研究し應用されるに至つた。

斯くして今や我が國の心理學は百花燦亂の觀がある。殊に、教育家養成の學校は勿論、専門程度の學校は大部分斯學を必修科としてゐるために、益々其

の普及發達を見つつある。併しながら、一方では、歐米の心理學界同様の悩みがある。即ち、心理學の本質問題、精しくは、心理哲學と心理科學、哲學的心理學と科學的心理學、先驗的心理學と經驗的心理學との關係問題、乃至は心理學と哲學との限界問題が、心理學者を悩ましてつある。而もこれは寧ろ心理學の本質的發達の要因となるべきものであるかぎり、我が心理學界の現在並に將來は樂觀しても差支がないのである。併しながら、實際に於ては、我が國現代の心理學の悩みは必ずしも尠少ではない。科學的傾向を重視すれば淺薄となり、哲學的傾向に従へば心理學の本領を超脱しがちだからである。

第二篇 意識概論

第一章 總說

意識概論とは、意識の意識たる所以即ち全一としての意識の本質を闡明することを目的とするものである。そしてこの目的を達成するために直接的及び間接的の二方法を用ゐることとする。前者は、主要方法で、意識其のものを考察することによつて、意識の本質を闡明する方法であり、後者は副貳方法で、意識を、それと最も密接な關係を有すると共に或る意味でそれと正反對な性質を有する身體(及び物質)と比較することによつて、意識の本質を闡明する方法である。但し、この二方法は、勿論便宜的區別で、兩者表裏補合してのみ始めて意識の特質を十分に闡明することが出来るのである。以下、先づ前法による意識觀を「意識の本質」といふ項目の下に説述することとする。

第二章 意識の本質

意識の本質を直接的方法によつて闡明するために、語義・本質(最狹義)及び構造又は分野の三段を辿ることとする。

(一)語義。意識は、英語の *Consciousness*・佛語の *Conscience* 及び獨語の *Bewusstsein* の翻譯語であり、そして *Consciousness* 及び *Conscience* は拉典語の *Conscientia* を語源とする語であり、*Conscientia* は自覺及び良心を意味する語である。

今この語の變遷を略述するに、上古希臘時代に於ては、今日の「意識」に相當する語がなく、中世に於て聖トーマス・アクィナスが始めて *Conscientia* といふ語を良心及び意識の意味に使用したが、この語を現時の心理學の意味に用ゐたのは佛蘭西のデカルトが嚆矢であるといはれてゐる。即ち、氏は、心の屬性を「思惟」(*Cogitatio*)とし、且「思惟」はやがて「意識」の義で、疑惑・理會・思惟・知覺・想像・肯定・否定・欲求・嫌惡等の諸作用を包含するものである。英吉利に於てこの語を使用した代表者はロックで、意識(*Consciousness*)を人格(*Personality*)と同一視し、且意識は其の

内容が断えず變化するにも係らず、不變化なもので、人格の恒久性を形成する要素であるとした。獨逸に於ては、ライプニッツは意識を單なる表象力とし、且無意識を認め、カントは意識を純粹意識又は意識一般即ち先驗的にして超個人的なそして客觀的認識を成立せしめる根本條件としての認識主觀と解し、ヘルバルトは、所謂表象全體の義に解した。斯くして、意識といふ言葉は、次第に倫理的意義即ち良心から離れて、心理的意義即ち狹義の意識の意義に用ゐられるやうになり、以て今日に至つた。

然るに、心理學上の意識の觀方にも、先づ廣狹三種ある。廣義の意識觀は、生物全體を包含するもの即ち原生動物(アミイバ)にも意識があると見るものであり、最狹義の意識觀は、意識を人間の特有と見るものであり、狹義の意識觀は、前兩觀の調和的見解で、下等動物より高等動物への進化過程の或段階に於て意識の萌芽を生じ、且それが漸次其の構造と機能とを複雑にすると見るものである。そして勿論最後の觀方が最も妥當である。

併しながら、この種の意識觀にも尙廣狹二種の別がある。所謂顯在意識の

みを意識と観るものは狹義の觀方であり、顯在意識と潜在意識とを包含するものは廣義の觀方であり、そして勿論後者が妥當である。

尙、序に一言すべきは、人間の意識と動物の意識との異同についてである。著者は、兩者の差異を單なる程度的差異とのみ見ないで性質的差異とも見るものである。即ち、動物の意識は、其の單純幼稚な點では、幼兒や野蠻人の意識と同じく、主として先天的・遺傳的であり、随つて、衝動・本能・單純感情又は本能的感情・感覺・知覺及び單純思惟が其の主要な部分であると共に、人間の意識の特色たる自識性や自律性や創造性を缺如する點に於て、甚だしく人間の意識と趣を異にする点と見るものである。併し、それだからといつて、直ちに、動物の意識が人間の意識と全然其の性質を異にする点と見るものではない。人間の意識には其の極めて幼稚な時代及び甚だしく未開な時代から教育が加へられもし、加へられてもゐるからである。事實、教育を全然受けない幼兒や未開人の意識が殆ど動物の意識と同一状態であると共に、有効な教育を受けた動物の意識が幼稚未開乃至低能な人間の意識を凌駕するのは、吾々の常に聞睹す

るところではないか。

(二)本質。意識の本質とは、意識といふ獨得な事實を、意識以外のあらゆる事實から區別せしめて、意識として存在せしめ且認識せしめる根據を、其自身の中に具有するもので、意識の根本特質・根本條件・必然性・普遍性乃至可能性である。そしてこの意味の意識の本質は、前述の如く、畢竟、自己超越性である。然るに、自己超越性とは、存在の根據を自己自身の中に具有する(自存性)と共に、自己の力で自己を斷えずよりよくする(自律性)ことである。随つて意識の本質は、意識は意識といふ存在、即ち、意識は意識するかぎり、於て、又は意識することによつてのみ、存在するものであり、自ら意識は自意識又は自覺であり、内面的・自證的である(自存性)と共に、意識が意識することによつて存在するとは、意識は意識することによつて發達することであり、随つて意識は異質的・流續即ち連續であると共に自由であり、發動・活動・發展・生産であり、過程作用・現實であり、目的的・志向的であり、質的・意味的であり、構造的・統一的・全體である。(自律性)

これを詳言するに、意識は先づ存在である。但し、意識は他に依屬する存在ではなくて、自己自身の根據の上に自立する存在、即ち本源的存在又は體驗的存在である。そして意識が自己自身の根據の上に自立するとは、意識は意識すること、於て又は意識することによつてのみ存在することに他ならない。而も意識に於ては意識すること以外に存在のしかたがないのであるから、意識されるものも亦或意味に於て意識でなくてはならない。即ち、意識は、自己を意識すること——自意識又は自覺を以て其の本質とするものである。そして意識即ち在を他にして體驗がなく、自己が自己を知る境地を他にして本源的境地がないかぎり、意識は體驗的・本源的存在でなくてはならない。

但し、識られる自己は、識る自己に對しては對象であるだけ、識る自己よりも意識性を不足するものである。即ち、凡そ對象としての自己は、自己存在の根據を自己に於て持たぬもの、即ち自己が存在することを自ら識らぬものであり、そしてこの點では物と揆を一にするが、而もそれが自己と識られる時には、識る自己となつて再び新たに識らるべき自己を生み出す點に於て、識られて

12. just

も識る自己とならない物とは截然趣を異にする。然り、物は如何なる場合にも對象であるが、意識は必ず何時か識るもの即ち作用となるのである。そして物が常に對象であるとは、後文に再述するやうに、物が意識から物と意識せられてのみ物であり得るが、物が物自身から物と意識せられることがないことを意味する。随つて物は勿論、嚴密には眞の存在即ち本源的存在ではなくて、意識に於てあるものに過ぎない。然り、眞の存在即ち本源的存在は只意識のみである。

意識が本源的存在であり體驗的存在であるが故に、其の存在の場所は勿論意識そのものの内にある。そして茲に意識の内面性又は内在性がある。實に意識は内に向へば向ふ程其の核心に近づくのである。事實、文字通の外的對象即ち意識外的存在は、意識ではなくて、只それが所謂内的對象即ち内容となつて、意識から意識中に指示され志向されてのみ意識されるのである。そして内的對象又は内容として意識から意識中に指示され志向されるとは、意識と内的關聯を保ち、意識によつて組織化されることである。事實、意識が對

象を意識するとは、對象を自己の象徴と見、それに即して自己を反省し、それを通して自己を表現することであり、更に對象の存在の根據及び意味を明かにすることである。これに對して、意識が自己を意識するには、意識は廣い意味で反省する他には途がない。そして反省とは意識することそのことを意識すること即ち、意識の作用を更に意識の對象とすることに他ならない。然るに、斯くの如き意味で意識が自己を反省すればする程、意識は一層深くなり一層眞實になると共に、意識は一層廣くなり一層明かになつて、これまで曖昧であつたものが明白となり、これまで鎖された客觀界が開けて來るのである。斯くして、意識は最も深い境地まで反省を續けて行くことが出来るのであるが、最も深い境地とは、いふまでもなく、識即在即ち「我思ふ、我在り」の境地又は所與即創造の境地である。そして斯くの如き境地から意識随つて實有の本質を觀破しようとするのがやがて本當の哲學であり、随つて哲學が最も十分な意味に於ける「自覺の學」である。

翻つて思ふに、意識の本質が自存性にあるといふことは、意識は自證的であ

ることを意味する。意識は意識することを他にしては意識として存在し得る途はないからである。事實、意識は「我れ意識せり」といふ内部知覺が伴ひさへすれば意識として成立するが、物はさうでない。随つて意識の外的對象即ち物や外界は虚偽であることもあり得るが、縦し虚偽な物や外界でも、それを或るものとして意識した場合には、意識したことが眞實である共に、意識したことが眞實であるためには、意識したことをそのことを意識したといふ内部知覺が伴はなくてはならない。そして茲に意識の主觀性があると共に、心理的眞理随つて心理主義の限界がある。心理的眞理は必ずしも客觀的事實でも論理的眞理でもないからである。然り、意識は、畢竟するに我が意識であり、意識の所謂充全性(Adäquatheit)は、只自己の意識分内に於てのみ存在可能であり、随つて他人の意識はこれをあるがままに認識することが出来ないのである。そしてここにデイルタイ派が體驗を自己の意識にのみ限り、他人の意識は追體驗即ち了解によつてのみ認識し得るとした所以である。さて、意識が意識することに於て存在するといふことは、意識は自己を對象

とするといふことであると共に、意識が自己を對象とするといふことは、リッブスがいつたやうに、意識はそれ自身の影を飛び越えて自己を自己の對象とすることである。即ち、意識が自己を對象とするといふことは、意識が一層高い意識になることである。而も意識はどれ程發達しても依然として意識である。そして茲に意識の連続性がある。實に、意識の一特質は、一刹那と雖も斷切することも停止することもないと共に、一旦發動した意識は決して其の儘に消失するものではなくて必ず何等かの形で殘存することである。茲に意識が「流れ」や「流續」と見られる所以がある。併しながら、意識の連続性は機械であり、作用であるといはれる所以がある。即ち、意識の連続性は機械的即ち同質的連続性ではなくて、異質的連続性である。即ち、意識は連続しながら内容が刻一刻と變化するところに、意識の一特質がある。そしてこれはやがて意識が自由だといふことに他ならない。但し、意識が自由だといふことは、勿論、意識が因果律に従はないといふことではないと共に、意識以外の身物から何等の影響をも受けないといふことでもなくて、意識の従ふ因果律は

異質異量の因果律であると共に、意識が身物より影響を受けるところよりも、意識が身物に影響を與へるところに、意識の眞面目があり、事實、意識が發達すればする程又は優秀な意識であればある程、身物を支配する力が多大であるといふのみである。併しながら、意識の自由性の眞義は、寧ろ自己超越性即ち自己を自己の力で不斷によりよくするところに存する。

思ふに、意識は、在在の根據を自己の中に具有するかぎり、自己をよりよくするもよりわるくするも自由な筈である。併しながら、意識の自由を、自己をわるくする方への自由と解することは、矛盾である。意識が自己意識であり、そして自己を意識するとは、自己を一層明白に理會するといふことであるかぎり、意識がよりわるくなるといふことは、意識が意識でなくなることだからである。事實、意識が嚴密な意味に於ける意識であるかぎり、意識以外の何ものからも支配されない。これは決して意識が身體や物質から全然影響を受けないといふことではなくて、これらの影響は、意識化されなければ、意識に影響を及ぼさないし、そして、これらの影響を意識化するかしないかといふことは、

意識の自由だといふことである。そしてこれは他人の意識の影響に於ても同様で、それが、自己意識化されなければ影響を受けないのである。高義の意志が意識の中核と見られる所以も、畢竟するに、それがこの意味の自由性を最も多く具へてゐるからに他ならない。

意識の自由性はやがて發動性又は活動性である。意識が内面的であるとか自覺的であるとかいふと、直ちに受動的であり消極的であるやうに思はれるが、決してさうではない。意識はどこまでも發動的であるが、只意識の方向が内面的なだけである。即ち、意識は只背進的だけである。事實、理知作用の如きは、常識的用語法に従へば、即ち形式的には受動的消極的であるかのやうに思はれるが、決してさうではなくて、實は發動的積極的である。そして、高義の意志が意識の中核と見られ、且發動性乃至活動性の多少が意識發達優劣の尺度と見られる所以、及び意識が物質と異なる所以が、やがて茲に存する。

意識が自由的であり發動的であるといふことは、やがて發展的であるといふことを意味する。そして發展とは、畢竟、異質的流續のことである。即ち、一

面に於て不斷に連続すると共に、他面に於て新要素を生産することがやがて發展である。實に、意識は何時も意識でありながら、而も意識であるかぎり、一刹那と雖も止つてゐないと共に、又同一の状態を保つてもゐないし、更に一刹那毎に新しい局面を展開して行くのである。而も意識は自律的であるが故に、繼續も變化も意識自身の力によつてのみ可能であるが、意識が單に繼續することには何の不思議もないのに對して、意識が新要素を生産して發展することには一箇の神秘性が伴ふのである。それは因果律に従ふと共に因果律を超越するといふ矛盾的現象だからである。

然らば何がかかる矛盾を可能ならしめるかといへば、意識の自己超越性が最も緊張することを他にしてはないのである。即ち、意識は常に全過去を背負ひつつ繼續するが、それが新しい對象に遭遇する時には、それを作用化するために意識が緊張すると共に、その結果、過去に現れなかつた新要素を生産するのである。随つて意識の真相は緊張に於て現れると共に、緊張は可能と實現との中間に位するものであるが故に、意識の真相は、無限の過去を背負ひな

がら、而もそれに満足しないで、現實に於て刻一刻可能を實現し、新要素を生産して行かうと緊張するところに存するのである。この意味に於て、意識の具體相は其の現在に存するといはなくてはならない。事實、物には現在以外に文字通の過去はあるが、意識には單に現在があるのみである。勿論、抽象的には、意識にも現在以外過去もあれば未來もある。而も、具象的には、過去は過ぎ去つた現在又は現在思ひ浮べつつある過去であり、未來は未だ來らざる現在又は現在思ひ浮べつつある未來であるに過ぎない。そしてここに意識の一特性としての現實性がある。

併しながら、嚴密にいへば、意識の現在は無限の過去の過去を荷ひ且無限の未來を孕みつつある永遠的現在であるが故に、意識の特性が單なる現實性にあるといふよりも、寧ろ永遠的現在性即ち流續性にあるとする方が一層妥當である。而も件の流續性は、單なる流續ではなくて所謂異質的流續であるかぎり、意識の流續性はやがて創造性であるといはなくてはならない。然り、意識は創造性であるが故にこそ、實有に於て最も高き地位を占めることが出来るのである。

そしてこの創造性が最も十分に表現されるのは人間の意識に於てである。文化といひ價值といふも、畢竟するにこの意識の創造性の成果に他ならない。随つて意識少くとも高等な意識の真相は、到底機械的な因果律即ち自然科学的方法を以てしては理會し得ないものである。實に、意識の眞髓の理會は、最も創造性の卓越したものの最も創造的な状態に於ける體驗及び其の反省によつてのみ可能である。

尙意識が異質的流續であり創造的であるといふことは、意識の發達は直線的又は量的でないことを意味する。随つて或る意識現象が、過去に嘗て現れたことのない新現象だからといつて、これを直ちに虚偽であるとか病的であるとかとしたり、或は兒童の意識を以て直ちに成人の意識の縮少と見たり、或は集團の意識を以て直ちに個人の意識の總和と見たりすると、断じて誤謬である。そしてここに心理學に諸多の分野を生ずる一個の理由がある。

さて、意識が断えず新生發展するものであるといふことは、他面から見れば、意識は合目的であることを意味する。但し、意識が合目的だといふこと

は、勿論廣義の用法に従つたものである。即ち、意識は凡て意匠的で、一言一行理知的な意味で目的を自覺してゐるものだといふことではなくて、部分的理知的には無自覺的でありながら、全體的根本的には自覺的で、必ず何ものかを目指し何ものかを指向してゐるといふ意味である。そしてこの點から見れば、意識は、勿論潜在意識を包含するばかりか、寧ろ量的にはこの方面が其の主要部分を形造るものであるとしなくてはならない。尙意識の目的性は前述の如く必ずしも直線的ではない。即ち、意識は或る段階に達する迄は直線的に同一方向に向つて進むが、それを達成すると一段高い目的を追求するし、若し或る目的が一舉にして達成されない時には、それを中止して別な方向に轉ずるが、而も一度志向した目的は、必ず何時かはこれを達成し、それがどうしても不可能な際には、意識は必ず傷害を受けるのを常とする。ヴントの所謂目的異様化説やフロイト等の精神分析説などは、やがて意識のこの特性を中心とする見解である。

翻つて思ふに、意識の一特性が異質的流續性にあるといふことは、意識は質

的・意味的・構造的・統一的・全體的であることを指すのである。意識が、水の流るる如く、一刹那と雖も止ることなく、又同一状態を保つことがないといふことは、やがて意識が質的な證據である。随つて意識を量的見地から見ようとすれば、生理學的・實驗的・唯物的心理學は到底意識の本質を把握し得ない。然るに、意識が質的だといふことは、如何なる意識と雖も獨自的なものであるが、而も件の獨自性は孤立性ではなくて、必ず何等かの全體に於て缺くべからざる獨得の役割を演ずるものだといふことである。そして茲に意識の意味性があらる。意味とは、要するに、部分と全體との關係だからである。但し、意識に於ける部分と全體との關係には殆ど無數の序列がある。即ち、如何なる具象的意識も、必ず個別對普通の相に於て存在し、且個別的なものは普遍的なものに對して上昇的に、普遍的なものは個別的なものに對して下降的に、それぞれ無限の段階によつて連続し、一の層面は其の下層面から見れば普遍的であるが、其の上層面から見れば個別的な關係に於て存在するのである。そして斯くの如き一個の具象的意識即ち一個の個別的普遍體又は部分的全體を若し「構造」

といひ得べくんば、意識は勿論構造的であるといはなくてはならない。

更に、意識に於ける部分と全體との關係が必然的で、全體は部分を所有し、部分は全體を組織すると共に、全體は全部分に依存し、各部分は全體に依屬し、随つて部分に於ける變化は必ず全體に對して影響を及ぼすものであるといふ點から見れば、意識は統一的であり、随つて意識の如何なる部分もスケテルンの所謂「部分全體」であり、自ら如何なる部分を理會するにも必ずこれを全體的立場から解釋すべきものであると共に、全體は部分に比して一層具象的であり、本源的であるといふ點から見れば、意識は全體的だといはなくてはならない。事實、意識は分析すればする程、抽象すればする程、眞實の意識から遠ざかると共に、これは一本のペンであるといふやうな簡単な命題でも、單なる理知作用ではなくて、全意識の統一を背景とし、根源とするものである。そしてこの意味で著者は、最近の心理學が意識の「全體性」又は「統一性」を重要視する點に於て、殆ど皆其の揆を一にすることを、意味深く思はずにゐられないものである。著者が本書に於て、常に意識を出來るだけ統一的に取扱ふことに少から

ぬ配慮を用ゐつつあるのも、蓋し、これがために他ならない。

但し、一見すれば、統一的といふことは變化的といふことと矛盾するやうに思はれるが決してさうではない。然り、變化的にして統一的な所に意識の根本特質が存するのである。随つて意識の統一性はいはば横的統一であるばかりではなくて、更に縦的統一即ち時間的統一——流續である。そしてこれは特に感情に於て顯著であることは音楽を聴く際に最も明白な所である。多種多様な感情が別々に感ぜられるのではなくて唯一つの複雑な感情として感ぜられ、而も刻一刻と其の複雑さを増しながら、眞に水が何等の停滯もなく流れるやうにメロジアスに流續するからである。そしてこれは意志に於ても同様である。即ち、意志に障害がなければ次第に其の力を増して或る目的地點に到達し、然らざる場合には、障害を排して目的を達する迄努力を繼續するのである。

斯くの如く、意識の根本特質が統一性である點から見て、直ちにこれをヘルバルトやヴントのやうに「統覺」(Apperzeption)と呼ぶのは必ずしも是認すべきことではない。蓋し、統覺作用は、一面から見れば聯合作用であり他面から見れば注意作用だからである。併しながら、意識殊に理知が統覺的に作用すると見ることは、意識の特質を統一性であるとする所以であり、殊に多くは受動的に見られがちな理知作用を發動的に見ると共に其の根柢が意志であることを明かにする所以である點に於て妥當である。そして此の見解を一步進める時には所謂人格又は自我の一義に到達するのである。蓋し、人格や自我は只意識の統一の上にのみ成立するものだからである。否、意識の統一其のものが心理學上の人格であり自我だからである。随つて意識の發達と優秀とは其の統一の形式の整備及び内容の充實を少くとも一主要條件とするものである。そして人格や自我は斷えず其の内容を變じながら其の人格たり自我たる所以の統一性は變らないのである。

以上、意識の本質に關する略叙を終つたから、次に其の構造又は分野について考察することとする。

(三)構造(分野)。意識は極めて複雑なものであるが故に、其の構造乃至分野も

亦諸方面から見ることが出来る。今其の代表的なものを列挙すれば、作用的方面と對象的方面、主觀的方面と客觀的方面、潜在的方面と顯在的方面、先天的方面と後天的方面、受動的方面と發動的方面、全體的方面と部分的方面、發達段階の低い方面と高い方面、個人的方面と社會的方面、正常な方面と異常な方面等がこれである。以下、順次其の略述を試みることにする。

(イ)作用と對象。意識は全一體であるが故に、具象的には分析を許さないが、意味的には必ずしも不可能ではない。そして、先づこれを本質的立場から見れば、作用と對象とに別つことが出来る。作用とは、何ものかを自己の内に指示する方面即ち其自身に於ては超越的な對象を内在化することによつて、これに意味を附與充實する方面であり、對象とは、意識の作用に指示されることによつて意識の内容となる方面である。但し、この兩面は相關的關係を保つかぎり、於てのみ、即ち、對象を指示する作用であると共に、作用によつて指示される對象であつてのみ、具象的意識の相關的二面を形造ることはいふまでもない。而も對象が作用によつて指示され且その結果として内在化された

ものは、嚴密な意味の對象——超越的對象ではなくて、寧ろ内容(素材・意義)即ち内在的對象であるが故に、意識に於て作用と對立するものは對象ではなくて寧ろ内容であるといはなくてはならない。而も内容は純粹の對象ではなくて既に作用化されたものであるが故に、具象的な意識の構造は、内容を通して又は内容に於て對象が作用化されたものであるといはなくてはならない。併しながら、意識は單に對象を作用化するだけではなくて、作用化された對象を更に作用化するものである。反省といひ、自意識といひ、内部知覺といふのは、何れもこの作用の作用化又は内在的對象の作用化に他ならない。そして、茲に對象と作用との一根本的相違がある。即ち、對象は直接には體驗し得ないで、只認識することが出来るが、作用は體驗し得ると共に反省することが出来るばかりか、更に、對象は一度作用化するだけだから、對象の認識は直ちに對象其ものの發展を意味しないが、作用の反省は必ず其の發展を意味するのである。即ち、畢竟するに、對象は超越的・客觀的・靜的であるのに對して、作用は内在的・主觀的・動的である。随つて内容を通して又は内容に於て對象が作用

化されることは、やがて、超越的なものを内在化し、客観的なものを主観化し、靜的なものを動化することであるが故に、論理的には矛盾であるが、而も、意識の本質が自己超越性に存するかぎり、それは聊も意とするに足らない。そして意識の本質が自己超越性であるかぎり、作用が意識の構造に於て其の主要面——本質的方面を形造ることは改めていふまでもない。作用は意味の體驗其のものであり、對象を構成し、それに意味隨つて存在性を附與すると共に、それを超越するのに對し、對象は其自身では何等の意味も存在性も持たないものだからである。體驗や自覺や反省が意識の本質的方面と見られるのも亦これがためである。

(ロ)主観的方面と客観的方面。以上の見方を事實としての意識に當て嵌めると、意識は主観的方面と客観的方面となる。前者は感情と意志とを含み、後者は理知である。

(ハ)顯在意識と潜在意識。次にこれを活動状態又は明否の状態から見れば、前述の如く、顯在意識又は狹義の意識と潜在意識(Subconsciousness)となる。顯在意

識とは識域以上の意識の義で、即ち、現在活動しつつある意識であると共に、直接に自覺の内容又は理知の對象となり得る意識であり、一言に意識者の自覺を伴ふものである。潜在意識とは識域以下の意識で、現在活動してゐないもの又は現在活動してゐても直接には自覺の内容又は理知の對象となり得ないもので、記憶の一半・異常意識即ち人格分裂現象に於ける副意識・第二意識・又は分離意識・(ライプニッツの)微小知覺・衝動や本能や習慣の一部又は俗語の無意識や靈感や直觀等をも包含する意識である。勿論、兩意識の關係は、スタンレー・ホールの比喻を借りれば、恰も氷山のやうに、一元的で、顯在意識も其の作用が經過すれば潜在意識となると共に、潜在意識も適當な刺戟さへ加はれば顯在意識となるのが常である。

そして斯くの如く、顯在意識と潜在意識との區別を可能ならしめるものは、やがて「識域」である。然るに「識域」(Threshold of consciousness, Schwelle des Bewusstseins)といふ語は、ヘルバルトが始めて心理學上に用ゐたものである。そして氏に従へば、前述の如く、表象中相争つて勝つたものは現實表象(Reale Vorstellung)の状態に

止り、他の諸表象の爲めに壓せられたものは單なる表象努力 (Streben vorzustellen) の状態に落ちる。此の兩状態の境界を意識の域といふのである。これに次いで、フェヒネルは始めて識域を刺戟と關係させて數量的に取扱ひ、其の概念に一轉化を與へた。即ち、氏に従へば、刺戟又は刺戟差異の可知性が始まり、且消える點が即ち闕である。そして此の語は、可知性の限界にある感覺及び感覺差異にも用ゐられると共に、感覺又は感覺差異をば此の點に持來す刺戟、刺戟差異又は關係にも用ゐることが出来る。随つて、吾々は感覺闕、感覺差異闕等の語をも用ゐることが出来る、又刺戟闕、刺戟差異闕又は關係闕等といふことも出来るのである。尙氏は、闕の概念を刺戟や感覺外にも及ぼし、睡眠及び醒覺に應じて、全意識も個々の思想の意識も將又與へられた方向の注意も皆消失生起の點を持つが故に、闕の概念及び語を一般にこれにも用ゐることが出来る」といつてゐる。これは精神物理的若くは精神的計量に於ても大體フェヒネルの概念が襲用されてゐるが、只氏が漠然と刺戟闕の項目中に説いてゐた極大感覺を生ずる刺戟價に對し、ヴントが新に刺戟頂 (Reizhöhe) 即ち刺戟の上

限又は最終刺戟の義)の名を與へて以來、刺戟闕及び刺戟の差異闕の意味に用ゐられる方が多いのみである。

以上要するに、意識は顯在及び潜在の兩面を有すると共に、潜在的方面の範圍が廣く、一瞬間に識域以上に現れる部分は極めて僅小である。然るに世には潜在意識の存在を否定するものも少なくない。即ち、潜在意識は無意識か又は注意や識野の邊緣に近い區域の意識や不明瞭な意識に他ならないとするのがそれである。例へば、ヴントの如きは、前述のやうに、心理學を「直接經驗の學」と定義する結果、直接經驗即ち顯在意識以外の潜在意識を心理學の對象とすることを不當とした。併しながらこれは極論である。問題は範圍又は程度の如何にある。斯くして識野といふことが重要な問題となる。

識野 (Field of consciousness) は、或一瞬間に於ける意識内容の全範圍、即ち注意(後文参照)が起伏して動搖する中の一波によつて繼續的の刺戟を識得する最大限度である。そして實驗の結果によれば、視覚では、色文字等を同時又は同時間を隔て相次いで露出せしめ、其の幾何までを一緊張の注意によつて知覺し得

るかを研究し、聴覺では、高い調子及び音色を等しうする音を繼續的に同じ間隔を置いて發し、これを數へないで此の數を知覺し得る最大限を測定するのである。尙、識野の廣さは、個人に依つて異なるのは勿論、同一個人にあつても、刺戟の種類・性質・注意の状態より、更に年齢・練習・興味等により幾多の相違がある。殊に、意識が變態を呈した場合、例へば、感覺脫失・放心・暗示性の亢進(俗に催眠状態)及び強迫觀念等の場合には、識野の狹窄を來すのが常である。

尙世には、この他半意識や無意識を意識の分野と見るものも尠くないが、著者はこれを採らない。

先づ、半意識について見るに、半意識とは眠から覺める時のやうな状態即ち潜在意識から顯在意識に轉移する過渡的状态を意味するが、而もこれは大まかには顯在意識に屬するからである。但し、半意識を否定しても、如何にして顯在意識が潜在意識になり又潜在意識が顯在意識になるかといふ問題は、諸に附することは出来ない。

前述の如く、意識の一特質が流續性に存する限り、如何なる意識作用も決し

て消滅するものではなくて、可能的状態に於て蓄積され、且機會があれば再現するのである。但し、意識は、單なる流續ではなくて、異質的流續であるから、件の再現は決して文字通の再現ではなくて、多少に係らず創造的なものである。そしてこの意識の異質的流續即ち蓄積及び再現には、身體的生理的作用が平行的に行するのは、改めていふまでもない。

次に、無意識(Unconsciousness)について見るに、著者は、前述の如く無意識といふ語を矛盾的なものとして排斥するものである。心理學は意識の學であり、隨つて、縱し無意識なるものが存在するとしても、それは心理學の領域以外のものであると共に、一般に無意識と呼ばれてゐるものは、實は眞の無意識ではなくて、寧ろ一時的な失意意識・無意志・無熟慮又は潜在意識であることは、氣絶・夢のな

い深い睡眠・異常な興奮状態・發狂等に徴して明かだからである。因に、無意識といふ語を始めて使用したのは、ライプニッツで、所謂無意識的表象の存することを認め、カントは、暗黒表象即ち無意識が、人間及び動物を通じてかなりに廣い範圍に亘つて存することを認め、ショーペンハウエルは、無意

識的原意志の存在を認め、ハルトマン(Hartmann, 1842—1906)は、無意識的精神作用が普通の意識作用に對して極めて重要な關係を有し、且心理學は半ば無意識に負ふべきことを認めて、所謂「無意識哲學」を主張した。但し、これらの諸家は、何れも哲學者であると共に、これらの諸家の所謂無意識は、畢竟潜在意識である。心理學上、始めて「無意識」を重大視し且これを意識から區別して明白な定義を下したものは、ヘルバルトである。これに對して無意識を排する學者は甚だ多く、最近ではヴントやブレンターノが其の代表者である。

この他、意識に内外の別を設け、後者を特に行動と稱し、前者のみを意識と見るものもあるが、これは通俗的見解であるが故に、著者はこの區別に與しないこととする。

(三)先天的方面と後天的方面。次に、時間的立場から見れば、意識は、先天的方面と後天的方面とに別れる。前者は、意識の遺傳的方面で、人格・自我・個性・性格・素質・本能乃至民族性等の大部分を占めるものであり、後者は、爾餘の意識である。

(ホ)受動的方面と發動的方面。次に、態度から見れば、意識は受動的方面と發動的方面とに別れる。そして、認知は主として受動的方面に該當し、意志は主として發動的方面に該當し、感情は其の中間即ち反動(應)的方面に該當する。更に詳言すれば、認知に於ては、感覺や知覺や模倣やは特に受動的であり、感情に於ては、單純感情や情緒及び情操の一部意志に於ては、本能及び衝動の一部も亦受動的方面に傾くのである。

(ヘ)全體的方面と部分的方面。次に、量的立場から見れば、意識は全體的方面と部分的方面とに別れる。全體的方面とは、比較的意識全體が一度に活動する方面で、人格・自我・個性・性格・氣質・智能・注意等であり、部分的方面とは、一度に活動する意識の部分が比較的一部分に限られてゐる方面で、意志・感情・認知の三分野を始め、意志に於ては、複雑意志(執意)と單純意志(衝動)及び本能、感情に於ては、複雑感情(複合感情・情緒及び情操)と單純感情、認知に於ては、思惟・知覺及び感覺の諸分野を指すのである。

(ト)發達段階の低い方面と高い方面。次に發達段階から見れば、意識は、前述

の如く、動物意識と人間意識とに別れ、後者は更に、嬰兒の意識・幼兒の意識・少年の意識・青年の意識・成人の意識・老人の意識に別れる。

(チ)個人意識と社會意識。次に、範圍から見れば、意識は、個人意識と社會(一般)意識(集合意識・民族意識・時代意識・階級意識・職業意識・性意識等)とに別れる。

(リ)正常意識と異常意識。最後に、状態より見れば、意識は、正常意識と異常意識(高能意識・低能意識及び病的意識)とに別れる。

第三章 意識と身體との關係

意識と身體との關係即ち所謂心身(又は心物)關係は、古來殆どあらゆる心理學者又は多くの哲學者の注意を惹き、且これに關する種々雑多な見解が發表されたにも係らず、今日に於ても尙未だ其の十分な解明が不可能な程である。そしてこれは、畢竟、意識と身體との關係が極めて密接にして且複雑なために他ならない。随つて、この問題を解決するには、何よりも先づ問題の意味を明かにしなくてはならない。因に、一言する。心理學では、物は必ず身を媒介として即ち物理的刺戟は生理的刺戟を媒介としてのみ意識と交渉するが故に、心物關係といはないで心身關係といふのである。

さて、意識と身體との關係問題に二大意義がある。一は科學的意義であり他は哲學的意義である。前者は、經驗的事實としての兩者の間に如何なる關係があるかといふ問題であり、後者は、先驗的本質としての兩者の間に如何なる關係があるかといふ問題である。随つてこの問題に對する解答も亦これ

に準ずるのである。即ち、科學的立場からの解答は、唯心論と唯物論と平行論と相制論とであり、哲學的立場からの解答は、以上の四種の見解がそれぞれ認識論的及び形而上學的の二種に別れたものである。そして其の立場乃至種類の如何を問はず、問題の中心は、意識と身體との間に主副の別があるかないか、若しあれば何れが主であるか、又其の交渉の仕方がどうかといふ點にある。これに對する科學的立場からの解答は、後者を主として前者に及び、哲學的立場からの解答は、前者を主として後者に及ぶのである。以下、先づこれらの諸見解を略述し、然る後に著者の見解に及ぶこととする。

第一に、科學的見解から檢するに、(イ)科學的唯心論は、意識と身體との存在を肯認しながら、而も兩者が存在するにも將た交渉するにも意識が優位を占めるとする見解である。

(ロ)科學的唯物論は、唯心論と異り、極端なものとならざるものとに別れる。極端なものとは、絶対に意識の獨立的存在を許さないもの即ち意識を身體又は物質と見るものであり、穩和なものとは、意識と身體との存在を肯認しながら、而も兩者が存在するにも將た交渉するにも身體が優位を占めるとする見解である。

(ハ)平行論(Parallelism)とは、意識と身體とは生物(人間及び動物)の同格的二面で、意識活動は必ず同時に神經(身體)活動を伴ふと共に、神經(身體)活動は必ず同時に意識活動を伴ひ、兩者は二本のレールや紙の表裏の如く、必ず共存し、随つて一者を以て他者を解釋説明することが出來ないとする見解で、精神物理的(psychophysical)又は人性論的(anthropological)平行論とも呼ばれる。

(ニ)相制論(Interactionism)とは、意識と身體とを別個の實體又は作用と見ると共に、兩者は相互に因果的交渉を爲し合ふものとする見解で、精神物理的相制説ともいはれる。

第二に、哲學的見地について見るに、形而上學的方面には、實有の本質を心と見る唯心論と身(物)と見る唯物論と心身(物)が平行すると見る平行論と相制すると見る相制論との別があり、認識論的方面には、これらの何れの見解が認識論的立場から見て最も妥當であるかによる別がある他、其の内容は科學的の

見解と大差がないのである。

意識と身體との關係問題に對する著者の見地は、畢竟するに、主心的相制的平行説である。即ち、意識と身體とは、生物即ち人間又は動物の平行的二面であり、随つて、意識のある所には必ず同時に身體があり、身體のある所には必ず同時に意識があると共に、意識と身體とはそれぞれ別個の本質を有する事實現象であるが故に、一を以て他を解釋説明することが出来ないが、而も兩者は相互に因果的な交渉を爲し、且意識は身體に對して優位を占めるものだとする見地である。

斯くの如き著者の見解は、第一に唯物論を排し、第二に唯心論を排し、第三に普通の平行論を排し、第四に普通の相制論をも排するものである。

これを詳言するに、第一に、唯物論は、哲學的には勿論科學的にも成立しないのである。先づこれを前者から見るに、哲學的な意味で、身體と物質即ち廣く物が存在するには認識論か形而上學かを基礎としなくてはならない。然るに認識論に於ては、それが眞に妥當であるためには、必ず意識の卓越性を豫想

しなくてはならない。「物がある」又は「物である」と認められ表象されなくてはならないし、そして認めるものそのものは斷じて物ではなくて意識であるかぎり、物の認識随つて物の認識論的存在は意識に依存しなくてはならない。事實、意識のない所又は意識のない時には、所謂「見れども見えず」であつて、物は認識論的にはないのである。極言すれば、縦し、物が意識以外に存在するとも、認識論的には、それが物即ち意識と異つたものであることが、意識によつて認識されなければ、存在することが是認されても、「物である」こと又は「物がある」とが是認されないかぎり、即ち、物があり物であると「識られないかぎり、物は物として、即ち意識を離れて其自身で存在することは出来ないものである。併しながら、前章に一言したやうに、凡そ意識は一面に於て自意識であるかぎり、意識の對象となるものは其の限りに於て凡て意識的——心的なものななくてはならない。随つて物も意識によつて認識されるかぎり、それは意識的——心的である。但し、意識は、他面に於て對象意識即ち何ものかの意識であるかぎり、物は物と「意識」される限りは心的であるが、而も「物」と意識されるかぎり

は文字通に心的ではなくて非心的即ち物的である。然り、物は心的であると共に心的でないものでなくてはならない。然らば心的にして非心的なものとは何であるか。其の本質に於て心的でありながら、而も甚だしく幼稚なものか又は粗雑なものである。認識の對象は認識の主體より低次だからである。然らば、高次の意識と低次の意識——物とを區別すると共にこれを統一するものは何であり、且何故に而く區別されるであらうか。それは實有であると共に、實有の本質は自己超越性だからである。

凡そ意識し得るものと世に在り得るものとの極致は一であると共に、それは實有の本質である。即ち、實有の本質は識ることに於て在ると共に、識ることによつて高まる所に存する。而も識ることは、單に識るもの自身を高めるばかりではなくて、識られるものをも高めることでなくてはならない。

然るに、物は識られることによつて高められることが出来るが、他を識り又は自己を識ることによつて自己を高めることが出来ない點に於て、確に低次の意識である。然り、物は自己超越性を極めて僅かしか具へてゐないもの、即

ち意識を豫想してのみ自己超越的であり得るものである。所謂自存性はあつても自識性自律性がなく、自分で存在しても動くことも出来ず、縦し、在ること動くことが出来ても、「自分で」在ることも、「自分で」動くことも出来ず、乃至は自分で在ること動くことが出来ても、在ること動くことを「自分で識る」ことが出来ないもの、即ち、無自覺的・靜的・他律的・機械的・沒價值的なものである。

斯くの如く、認識論的に見れば、凡そ世に意識的でないものは一つもない。然らば、これを形而上學的に見たならば果してどうであらうか。

實有を識即在と見るか、在即識と見るかに依つてこれに對する解答が異つて来る。即ち「存在は意識である」と見れば、物の獨立の餘地が皆無であるが、「意識は存在である」と見れば、「物」の獨立の餘地が多少ある。前者に於ては、存在は意識と同範圍か又はそれより狭少であり、存在論は認識論の基礎の上のみ可能だからである。これに對し、後者には二つの解答が可能である。第一に、意識と存在とを同位的に解する場合、即ち「意識は存在であり存在は意識である」と解する場合には、「物は意識としての存在である」となるから、物の獨立性が

是認される根據は無くなる。第二に、存在と意識とは包含的即ち大小的關係を有すると見る場合には、存在には意識以外のものがあり得るから、物の獨立性を是認する根源を見出すことが出来ないとも限らない。只この場合に於て一つの難關がある。

物は意識に對してのみ物であるが、而も意識と物との區別は只兩者を包含するもの即ち實有中の區別としてのみ可能であるから、物が獨立性を得るには、この實有に於て如何なる根源を有するかを明かにしなくてはならない。而も實有は意識と物との區別を可能ならしめるものであるかぎり、それは純乎たる物でないことは明瞭である。然らば純乎たる物でないものとは何であるか。それは、勿論、意識的なもの以外の何ものでもない。意識は自己を意識と自識すると共に、物を物と他識することによつて實有の自己超越を可能ならしめるものだからである。随つて物は、形而上學的にも、意識以外には其の獨立性を獲得する根源を見出し得ないのである。

但し、茲に尙一つの途があるやうに思はれる。それは實有其のものを物だ

と見る唯物論の見方である。併しながら、これはいふまでもなく獨斷論である。少くとも認識論的根據を失はざらんとする限り、物を意識に置き換へることは不可能である。物が物として獨立するには、物は十分な意味の自存性を持たなくてはならないのに、いふ所の自存性はやがて自識性以外の何ものもないからである。

併しながら、唯物論の不成立は決して直ちに唯心論の成立ではなくて、寧ろ極端な唯心論の不成立である。意識が物を「意識」する點に於ては唯心論が正しく、意識が「物」を意識する點に於ては唯物論に眞理が存するからである。即ち、心物

斯くして最後に残るものは、何等かの意味の平行論のみである。即ち、心物を實有の實體的區分と見ないで、在り方、即ち様相的區分と見ることである。然らば、心は實有の内面であり、物は實有の外表面であることである。一度問題がこの點に觸れると、又認識論に逆轉せざるを得ない。意識の直接對象となるもの即ち所謂内部知覺の對象となるものが内面であり、意識の間接對象となるもの即ち所謂外部知覺の

對象となるものが外面である。随つて心の存在様式は統一的であり、識即在的であるが、物の存在様式は分離的で、識と在との間に間隙がある。更に別言すれば、心は最も十全な意味で即ち其自身に於て存在するが、物は心の對象としてのみ即ち心に志向されてのみ存在するのである。物が存在することは只心が存在することを根據としてのみ可能である。

以上、要するに、哲學的見地から見れば、物(身)の獨立は不可能である。只、實有の本質を意識と解し、且、狹義の意識と身物とを其の第二義的區分即ちその平行的二面として見る時には、身物は狹義の意識と異つて存在權を獲得するところが出来るのである。これ、著者が自己の立場を主心論(的平行論)と稱する所以である。

併しながら、轉じて科學的見地からこの問題に對すれば、光景に多少の相違が生じて来る。抑も科學的立場は分析的立場であり、随つて所謂心物平行論の立場だからである。事實、意識と身體との平行は吾々の常に經驗し且觀察する所である。そして其の最も顯著な例證は神経系統と意識との相關作用

である。即ち、神経系統のある所には必ず意識作用があり、神経系統の單複健否がやがて意識の優劣健否で、其の相關作用は精密な數量的計算が出来る程

(例、脳量と智能との關係の如き——後文再説)である。

併しながら、意識と身體とは單に平行するだけではなくて相制すること亦否み難き事實である。即ち、意識は身體に影響を及ぼすと共に、身體も亦意識を制約する。而もその相制も同等ではなくて意識が優位を占めるのである。即ち、個人に於ても團體に於ても、生物の發達段階が低い時には、身體が量的にも質的にも優位を占め、それが高まるに従つて意識が次第に優位を占めるやうになるのである。

これを具象的にいへば、先づ生物は其の幼時や原始時代には、身體が主で心的部分は極めて弱少であるが、次第に其の強さと大きさを加へて、やがて文字通に心身(物)平行の境地に入り、其の後には心が身(物)を統制し、最後は殆ど所謂「心の欲する所に従つて矩を踰えず」の境地で心が主となり、更に身體が衰弱するにも係らず心が發達するといふやうな境地に達するのである。そして高等

複雑な意識が殆ど全く身體に依存しないことは、身體の老衰したものが非常に深淵な思想を生み出し、而も斯くの如き深淵な意識作用は外觀的にも解剖的にも殆ど示すに足る程の身體作用を伴隨しないことや、大人と子供、文明人と未開人、高能者と低能者との精神的相違が身體的相違に比して甚だ多大であること等に徴しても明白である。随つて所謂健全なる精神は健全なる身體に宿るの諺は、必ずしも没批判的に肯定すべきではない。

次に、これを廣さについて見るに、心の對象となるものは心と物との凡てを包括するが、物は心を包括しない點に於て心は一層本源である。一見、心が皆無であるやうに思はれる初生兒に於てだに心は出生と共に發動するのみか、胎兒、極端には精子や卵子に於てだに遺傳性先天性として可能的に作用してゐるのである。そして茲に唯物論が發達の低い人達から歡迎される一個の理由が横たはつてゐる。實に、生物は發達すればする程心的となり、心の卓越性を認めると共に、始めは純粹の物と思はれたものに精神的意義を附與して、物を單に心の象徴や手段と見るやうになるのである。これ著者が主心的

平行的相制論を取る所以である。

次に、意識と身體との相制關係について見るに、第一に、意識は必ず身體に對して何等かの影響を與へるものである。そして身體に與へる影響は、情意が

先づ、これを意志について見るに、意志は、行動即ち身體に表現されてのみ始めて完結するのが通例である。意志には不行爲即ち消極的否定的なものもあるからである。併しながら、意志が行動となるのは、單に複雑高等な意志即ち執意のみではなくて、單純な意志即ち衝動本能に於ても亦さうである。否、後者に於ては却つて身體に表現される部分が多く、時としては純粹の生理作用とさへ思はれるものもないではない。

これに次いで感情も亦必ず身體作用を伴ふものである。改めていふまでもなく、廣義の感情は單純感情・複合感情・情緒・情操の四種に別つことが出来ると共に、情緒が其の代表者であるが、而も情緒の一主要特色は、顯著な身體作用即ち表情を伴ふことである。尤も、後文に再述するやうに、表情は感情の結果

ではなくて寧ろ其の原因であるとする説もないではないが、これは極論であるかぎり、感情が身體に影響を及ぼすことは改めていふまでもない。此の他感情は、心臓の鼓動・呼吸・血液の循環・筋肉や皮膚殊に顔面や手足の運動等殆ど身體の全部に亘つて影響を及ぼすものである。殊に、最も激越な情緒例へば憤怒などの際には身體への影響が特に顯著であることは、母が憤怒中又は其の直後に其の乳を乳兒に與へる時は死を招來する如き毒素を出すことに徴しても明かである。

最後に、理知の身體への關係は最も疎遠であるが、而も何等かの影響を身體に與へることは、フレイエーの「觀念力説」に俟つまでもなく否むべからざる所である。例へば、深い思想學問を有するものは自ら其の顔容も高尚になり、賤劣な思想の持主は其の顔容も自ら賤劣になるが如き即ちこれである。併しながら、此の方面は寧ろ身體より影響を受ける部分の多い方面である。

第二に、身體の意識に及ぼす影響について見るに、何よりも先づ、意識は特別の生理器官即ち腦髓を始め感覺器官に至るまで肉體的なものの伴隨によつ

て可能であると共に、生理器官の單複がやがて意識の高下を意味することに徴して明かである。そして最も多く物質の影響を受けるのは感覺である。實に感覺は、意識中最も物質に近い方面であつて、物理的隨つて生理的刺戟によつてのみそれは可能である。事實、感覺は、後文に再述するやうに、主として生理器官を通して起る外界事物の意識である。そしてこれは知覺に於ても、それが「感覺に現れた外界事物の認知」又は「感覺乃至外界事物の意味」と解されるかぎり、物質の影響を受けることの甚大な意識である。更に高等な理智作用も感覺と關係を有すると共に神經を動力とするかぎり、間接にはあるが、物質の影響を受けるのは否むべからざる事實である。最近明白になつた、思想惡化殊に危險化の一原因が身體の孱弱にあるが如きは正しく其の證據である。これに次いで、感情も亦前述の如く、反應的意識作用であるかぎり、外物乃至身體から影響を受けることは明白である。そして茲に「ジェームス・ランゲ説」の長所がある。事實、悲哀の顔容をすれば必ず多少の悲哀感情を惹起し、憤怒の際聲を大にして怒號すればする程憤怒の情を強くし、端座すれば自ら嚴肅

な情が湧起するのは、吾々の日常經驗するところである。

最後に、これは意志についても略同様で、健全な身體を有するものの意志が強いと共に、氣候の悪い所殊に寒い地方に生活するものの意志が剛宕であり、更に身體の鍛練即ち筋肉の鍛練がやがて意志の鍛練を伴ふものである。以上の略叙によつても明かなやうに、意識は必ず身體と關係するものである。併しながら、意識が身體と關係を有するといつても、それには親疎の別がある。そして心理學は、前述の如く、心身(物)關係そのものの研究を使命とするものではないから、身體方面の研究に於ても、意識と最も密接な關係を有する部位の研究を以て足れりとしなくてはならない。然るに、意識と最も密接な關係を有する身體の部位とはやがて神経系統であるから、以下、神経系統の概略を記説することとする。

さて、神経系統(Nervous system)は、神経物質によつて構成されたもので、腦脊髄神経系統及び交感神経系統に二大別される。そして神経物質に關しては異説があるが、所謂ノイロン説(Neurontheorie)が最も妥當である。

この説に従へば、神経系統はノイロンと稱する原體の集合である。そしてこの神経原を構造上の單位として、即ち解剖的に見れば、一個の細胞と二個の突起との二部より成つてゐる。細胞は外圍に柔軟な膜を被り、中に原形質より成る粘液があり、其の中には核があり、核は更に一個乃至數個の仁を含んでゐる。細胞には又二様の突起即ち纖維がある。其の一は、細長で、末梢に至る迄殆ど分岐することがなく、唯稀にこれより直角をなして分岐する側枝を出すだけで、軸索突起(Achsenzylinderfortsatz)が即ちこれであり、そして身體の表面にある神経の大部分はその集合であると共に、刺戟を細胞體から他に傳達することを任務とするものである。其の二は、多數の比較的短い突起で、細胞から出ると直ちに分岐を重ね、樹枝の如き觀を呈するが故に、これを樹枝狀突起(Dendrit)といひ、他からの刺戟を細胞體に傳達する(刺戟の傳達の速度は、一秒百呎より三百五十呎の間にある。)ことを職能とするものである。通例解剖學上某某神経と呼ばれるのは、中樞の神経細胞より發せる多くの軸索突起の結束である。この軸索突起の完全に發達したものは、其の中心部に半透明の軸索が

②
△
X

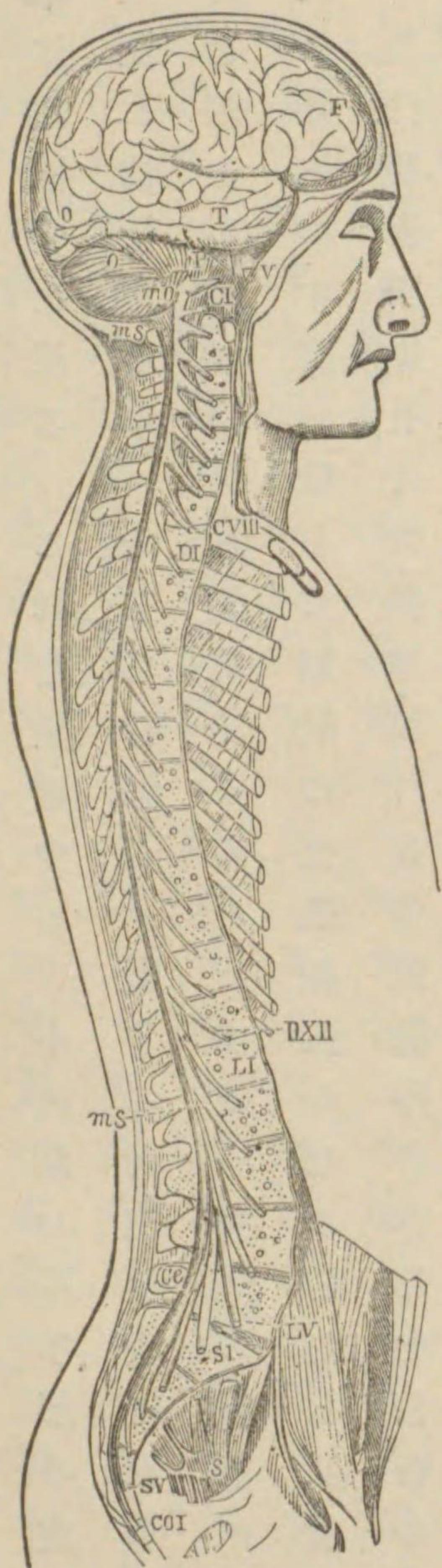
ある。次に、これを機能上の單位として見れば、上記構造上の單位が少くとも一對あることが必要である。

神経系統は、以上の神経原が多数(百十億)相集り相接觸(連続に非ず)して連絡(感覺性神経原と運動性神経原との連絡)を保つことによつて成立するものであるが、これには高等動物の神経系統と下等動物の神経系統との別がある。そして前者は脳髓といふ特殊の器官を中心とするのに對して、後者は脳髓が未だ分離せず、只脊髓系神経のみを器官とするものである。

高等動物の神経系統は中樞と末梢との二部に別れる。中樞神経(Central nerve)は、脳・脊髓及び神経節(交感神経の中心)の總稱で、神経細胞と神経纖維とを有し、興奮の綜合・抑制・轉化等を司るものである。末梢神経(Peripheral n.)は、神経中樞に存する神経細胞より出た神経纖維が、種々に集束されて成るものの總稱で全身に分布し、主として興奮の傳達即ち外界の刺激に應じて末梢部に起つた興奮を中樞に傳へると共に中樞に起つた興奮を末梢に傳へ、更に、各神経中樞間の連絡を行ふものである。因に、普通、中樞神経といへば、脳脊髓神経の

みを指すのである。

これを詳言するに、(一)中樞神経は、甚だ複雑なる配置を有する灰白質(主として神経細胞より成り、少量の神経纖維を交ふ)及び白質専ら神経纖維より成る)より成立し、脳及び脊髓に大別し、脳は更に數部に區別されるが、其の主要なものは、延髓・橋・小腦及び大脳である。尙腦は一切の肉體作用中最も複雑微妙なもので、到底説明し悉すことが出来ない。以下、脳脊髓神経について順次簡単な説明を試みることにする。



(第一圖) 人類の神経系の大觀
F(前頭葉) O(後頭葉) T(顳葉)
は大脳 Cは小腦 Pは橋 moは延髓の
後 msは脊髓の終端 CIより CV III
までは頸部神経 DIより DX IIま
までは胸部神経 LIより LVまでは腰
部神経 SIより SVまでは薦骨神経
CoIは尾骶骨神経である。

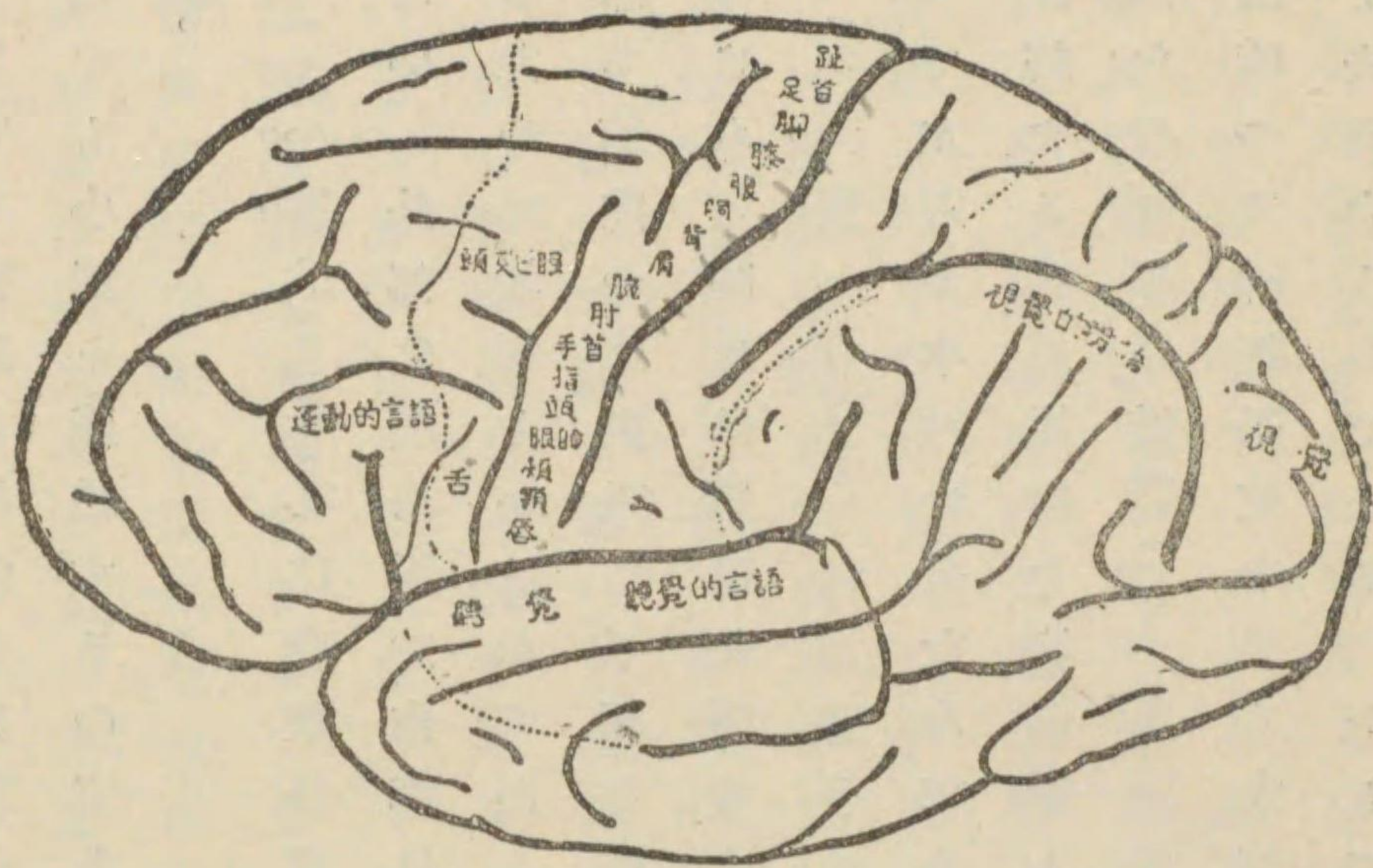
(イ)脊髄。(Spinal cord)は、脊梁骨内にあつて略圆柱状を成し、上端は延髄に連り、下端は尾骶骨に至る。これを横断すると、中央部にH字形の灰白質があり、其の周圍に白質がある。そして脊髄より發する神経の数は三十一對で、各前根(運動を司る)及び後根(知覺を司る)を有する。脊髄の機能は感覺器官及び筋肉と腦との中間に位して刺戟の交通機關となる他、自ら反射運動の中樞となり、且分娩・脱糞・瞳孔散大・排尿・發汗・血管運動等の作用を營むのである。

(ロ)延髄。(Medulla oblongata)は、脊髄の上部に位して腦と脊髄とを連絡する長さ一インチ位の筋肉で、其の形狀は錐體であり、外部は白質、内部は灰白質である。十二對の神経の大部分はここを起點とし、且其の反射が身體の筋肉殆ど全部に及ぶが故に、生活上極めて重要な部位である。而も其の機能は、單に刺戟の交通機關であるばかりでなく、又脊髄より發する諸作用を總括し、嘔吐・咳嗽・咀嚼・吸啜・嚥下・眼瞼閉鎖・嘔吐・唾液分泌・呼吸・心臟抑制・心臟鼓舞・血管收縮・血管擴張・痙攣・發汗・糖尿等の諸作用をも營むのである。

(ハ)橋。又はヅッロリ氏橋(Bridge or Varol's bridge)は、感覺性及び運動性神経纖維の走る所で、脊髄と腦髓とを連絡するものである。橋の兩端を小腦中脚と稱し、茲でも小腦と連絡するのである。尙この橋と小腦とを合せて後腦とも稱する。

(ニ)小腦。(Cerebellum)は頭蓋後窩にある。其の大きさは大腦の八分の一にも足りない。外部は灰白質で内部は白質であるが、其の白質の形狀は樹枝に似てゐるために、活樹といはれてゐる。其の機能は身體運動の調節を司るにある。即ち筋肉の運動殊に平衡を保つに必要な運動を調節する。随つて小腦が損傷される時には運動失調(後文再述)に陥るのである。

(ホ)大腦。(Cerebrum)は頭蓋骨の中にある。其の形は略卵形で、中央の縦列によつて左右兩半球に分たれてゐる。そして此の兩半球を其の底面に近い所で連絡する神経纖維を胼胝體といふ。外部は灰白質で内部は白質である。灰白色の部分は皺裂(Convolution)が甚だ多く、所謂大脳皮質(Cerebral cortex)であるが、腦随つて神経系統中最も大切な部分で、其の發達の如何がやがて意識の發達を決定するのである。そして大脳皮質は、前頭葉・顛頂葉・顛葉・後頭葉の四部



(第二圖) 唇から爪先迄の觸覺及び運動の中樞を示し、併せて言語中樞と眼・耳・舌・唇を司どる中樞との關係を示す。

に別たれる。大脳皮質は最も高等な中樞で、感覺・知覺・思惟・感情・意志等あらゆる意識作用は必ず此の皮質に於ける或種の變化を伴ふものである。併しながら、一々の意識作用について大脳皮質の全體が一樣に關係するのではなくて、其中特に或作用と密接な關係を有する部位のみが關係するのである。そして斯かる部位は、解剖學・病理學等の研究に基づき、フレクジツヒ (Flechsig) やムンク (Munk) 等熱心な研究家の努力により、稍明かにこれを指示することが出来るやうになつた。

中樞の部位が始めて明瞭に定められ

たのは、一八一六年でブローカ (Broca) の發見した言語中樞は後頭葉に、聽覺中樞は顛頂葉に、聽覺中樞はローランド溝の後部に、運動中樞はローランド溝の前部に、嗅覺中樞は海馬廻轉の近傍に、味覺中樞は嗅覺中樞の附近にある。以上他に聯合中樞といふものがあつて、注意や感情や思惟等の作用は此の部位で行はれるものと想定されてゐる。中にはフレクジツヒの如く、前頭葉の聯合中樞に統覺・注意の作用、顛頂葉・顛頂葉の聯合中樞は思惟作用に關係ありとし、聯合中樞の中にもそれぞれ部位を分つものもあるが、これは未だ確定したものではない。随つて大脳皮質各部の作用は尙不明に屬するものが甚だ多いのである。

尙腦は感覺機關を除いた諸機關中最も早く發達するもので、生時既に完全に發育したものの四分の一以上の重量(平均十三・九オンス即ち約三百九十四瓦)を有し、滿四歳には十分の九の重量に増し、其の後は極めて徐々に増加するだけである。そして成人の腦量は、人によつて異なるが、歐洲人(男)にあつては大凡四十九乃至五十オンス(千四百瓦内外)である。記録に上つたもので、從來最

大の脳量を所有したものは、佛蘭西の博物學者キユヴィエー(Cuvier)で六十四・五オンス(一八二九瓦)であつた。(因に、バイロンは一八〇七瓦、シラーは一六八〇瓦、カントは一六〇〇瓦、桂太郎は一六〇〇瓦であつた。)そして一般に脳の重量の大きいものは意識の働きも亦旺盛であるが、勿論例外も少くない。尙人間の脳の重量は類人猿の約三倍、犬の約八倍乃至十倍に當るといはれてゐるし、更にチーントン人(獨英人)は平均男が一四二四瓦、女が一二七三瓦で、日本人は男が一三六七瓦、女が一二一四瓦である。

次に(一)交感神経系(Sympathetic nervous system)は、脳脊髓神経から全く獨立すると共にこれと密接な關係を保有するもので、多數の神経節(Ganglion)及びこれを連絡する神経纖維より成る自律的神経系(Autonomic n.)である。そして其の主なるものは心臓の基底、腹腔の上部及び腰部にあつて、それぞれ循環・消化・生殖を統制する。斯くの如く、交感神経系の職能は、内臓器官の自動運動即ち有機的生活を司る所に存し、随つて意識と没交渉なやうに見えるが、實際は脳脊髓神経系と相接し相影響してゐることは、悲しい時に消化不良となると共に、胃の

悪い時に氣分が悪いことに徴して明白である。

最後に、(三)末梢神経系は、遠心神経・求心神経、中樞間神経の三種に別れる。遠心神経は、中樞に起つた興奮を末梢器官に傳達する神経で、運動神経・分泌神経・營養神経・抑制神経の別がある。求心神経又は感覺性神経は、末梢器官に起つた興奮を中樞に傳達する神経で、知覺神経・感覺神経・反射神経の別がある。中樞間神経又は聯合性神経は、各中樞神経の連絡を司る神経纖維で、或は大脳と爾餘の中樞との連絡を保ち、或は小脳と延髄若しくは脊髓とを連絡して、中樞に於ける複雑な聯關作用を起さしめるものである。

第三篇 意識各論

第一章 總說

意識各論とは、前記、意識の諸分野を、個々別々に闡明することを目的とするものである。そしてこの目的を達成するために、先づこれを全體觀及び部分觀に二分する。

全體觀とは、前述の如く、意識の全體的方面を對象とするもので、人格・自我・個性・性格・氣質・智能・注意の諸項を包含する。そして人格は、意識の全野を略滿遍なく包括するのに對し、自我は其の形式的方面、個性は其の實質的方面より全意識に關係し、性格は主として情意を中心とし、氣質は感情を中心とし、智能は理知を中心とし、注意は意志及び理知を中心として、それぞれ意識の全野に關係するものである。

部分觀とは、意識の部分的方面を對象とするもので、意志・感情・理知・社會意識

及び異常意識(高能意識・低能意識・病的意識)等をそれぞれ攻究するものである。尙、序に一言すべきは、問題の取扱方についてである。著者は、序文を始め、隨所に反復したやうに、意識を統一體と見ると共に、出来るだけこの特色を損傷しないで其の真相を闡明したいと思つてゐるものである。斯くして著者は、問題を取扱ふに、全體より部分に、又は一般より特殊に向ふ方法に従つてゐるのである。本章に於てもこの點に注意し、先づ全體觀から出發して部分觀に至るやうにしたのであるが、而も嚴密にいへば、この區別は全く便宜的のものであつて、所謂全體觀も全き意味の全體觀ではなくて、只比較的に全體的な問題を一括したものであると共に、部分觀も亦文字通の部分觀ではなくて、只比較的に部分的な問題を一括したものであるから、出来るだけ他の部分との聯絡を明かにするやうに注意を拂ふつもりである。部分觀に於て、意志・感情・理知の順序に従ひ、又これらの何れに於ても全體的な方面(例へば執意・情緒・思惟)を先にしたのも、畢竟これがために他ならない。

第二章全體觀

第一節人格

人格(Personality)には種々の意義があるが、心理學上の人格とは、要するに「自我意識を中心とした意識の統一」の義である。随つて凡そ具象的な意識が「我が意識」であるかぎり、人格は最も具象的な意識であり、且それは身體とも極めて密接な關係を有するものであるが、而もそのために、心身兩面を心理學上の人格の同位的二面とすることは、聊か廣きに失する觀方といはなくてはならぬ。

この意味の人格には、諸多の方面乃至分野があるが、先づこれを形式的方面と實質的方面とに別つことが出来る。形式的方面とは、統一者としての自我意識の方面であり、實質的方面とは、被統一者としての意識内容の方面である。次に、人格は先天的方面と後天的方面とに別つことが出来る。先天的方面と

は、遺傳又は素質(Aanlage)であり、後天的方面とは廣義の經驗である。但し、個性及び性格は此の中間に位し、先天的にして後天的である。最後に、人格は意情知の三面に別つことが出来る。意的(乃至情意的)方面とは性格であり、情的方面とは氣質であり、知的方面とは智能であり、更に個性は最も廣く、これら實質的方面の統一體である。但し、これらの諸方面又は諸要因中最も重要なものは、統一作用そのものであるが故に、以下多少の説明を試みることにする。

さて、人格の統一には諸多の意義がある。單一性としての統一と同一性ととしての統一、縱的統一と横的統一、知的統一と情的統一と意的統一、心的統一と身的統一等が、即ちこれである。

これを詳言するに、單一性とは、一個の存在は一個の存在であつて數個の存在でないといふこと、換言すれば、甲は非甲に非ずといふ思惟の根本法則に合致するもので、或る人格は其の人格であつて他の一切の人格乃至一切の存在と異るといふことである。この點から見れば、二重人格や三重人格は嚴密な意味の人格ではない。人格といはれる限り、其の統一原理は一個であり、随つ

て主觀的には勿論、客觀的にも亦一個體でなくてはならない。同一性とは、人格といはれる限り、如何なる時と所とに於ても同一の特質を保つてゐるといふことである。即ち、凡そ人格といはれるものは、少年時代と青年時代と成人時代との間に於て、殆ど別人と思はれるやうな内容及び形式上の差異がありながら、而も否むべからざる同一性を主觀的にも客觀的にも具有するものでなくてはならない。

次に、縦的統一とは、時間的連續的統一即ち昨日の我と今日の我との統一で、其の動力は記憶であり、随つてそれは知的である。但し、時間的連續的統一には此の外將來的情意的なものもある。要求、理想、期待等の作用に於て、あるべき將來の自我と現在の自我とを統一させることである。これに對して、横的統一とは、同時的統一で、或刹那間に人格が同一性を保つことと、知的、情動的、意的の區別があるが、其の根柢に於ては勿論、意的統一が中心動力となつてゐる。

尙此點について一言すべきは、人格の統一（殊に時間的統一）の動力が記憶作用だとする説（例へばジェームスの説）についてである。著者は記憶を人格統

一の主動力と見ず、單に時間的統一の一部分と見るのみである。而も人格の一動力としての記憶は、普通の記憶ではなくて、特別の感情を伴つたもの、即ち「記憶感」と見るものである。勿論、一般の記憶も人格の間接的動力であることは、例へば過去に見た故郷の山を回想する場合に、「我が過去に見た山といふ意味に於て人格の動力とはなり得るが、其の山に遊んだものが「自分だ」といふ記憶とはその趣を異にする。即ち、前者は偏に知的であるのに對して、後者は一層全意識的であると共に一層情意的であり、且自己と一層親密である點に於て趣を異にする。即ち、過去の我を回想して「我である」と思ふのは、回想される過去の我と回想する現在の我とが極めて親密な關係を有すること否同一自我なることを直接に意識するがためである。随つて記憶に依る人格の成立は、過去の自我と現在の自我との一致ではなくて、一自我の發展過程に於ける分離に於ける一致、即ち、過去の自我を現在の自我の先行過程とするものである。

知的統一とは、理知を直接動力とする統一で、それが人格統一上重要な意義

を有することは、上記記憶と人格統一との關係に徴して明白である。知識——常識・學問・思想が人格の統一力であることは萬人周知の事實である。併しながら、知的統一力は部分的表面的統一力であつて、人格の全體的根本的統一力ではない。

情的統一とは、感情を直接動力とする統一、即ち氣分・情調・趣味・信念・信仰等であるが、これが人格の統一上重要な地位を占めてゐることは贅言を俟たない。知的統一といひ意的統一といふも、其の根柢乃至背景に於てこの情的統一例へば氣分・情調の統一といふものがない限り、遂に空言に過ぎないのである。極言すれば、人格の統一は感情の統一を基礎とするといつてよい程である。

意的統一とは、意志を直接動力とする統一である。本來、意志は、後文に詳述するやうに、統一力で、單に、理知を理知とし、感情を感情として統一するばかりでなく、更に理知と感情とを統一して行爲の動機を形成し、斯くして、全人格を行爲の一點に統一すると共に、更に理想を構成して現在の人格と將來の人格とを統一するものである。特に注意は、意識全體の勢力を集注するもので、其

の強弱が直ちに人格の統一力の強弱だといふことも出来るのである。

身體的統一とは、生理的生命を動力とする統一である。由來、生命は其自身一個の統一體である。そして意識の統一が身體の統一に負ふことは、身體が健全で諸部位諸機關の間に扞格がない時が意識の統一する時であり、其の反對が意識の不統一な時であることに徴しても明かである。

最後に、人格には諸多の障礙があるが、それは意識の障礙中の代表的なもの即ち病的意識の代表的なものであるが故に、これは改めて後文に述べることにする。

第二節 自我

自我 (Self) にも種々の意義があるが心理學上の自我は、要するに「我れ」といふ自覺そのもの、即ち、具象的意識の主體又は人格の統一者であり、随つて、主として形式的・作用的・主觀的・經驗的なものである。

但し、大まかな意味の自我には、實質的・對象的・客觀的な方面を包含するのを常とすると共に、時にはこれを先驗的に解する場合もないではないが、自我を意識や人格と區別する時には、前述のやうに、意識や人格の形式的・作用的・主觀的・經驗的な方面と解すべきである。随つて、これを廣義の自我と區別するには、寧ろ自我意識と稱するのが最も妥當である。以下、この見地から、先づ自我意識の特質を考察し、然る後に廣義の自我に及ぶこととする。そして、廣義の自我中、實質的・對象的・客觀的な自我は、自我意識の實質的條件であり、先驗的自我とは、認識論上の用語である。

さて、自我意識 (Self-consciousness) とは、人格の形式的構成要因で、消極的には、他の人格及び非人格より自己の人格を區別し、積極的には、自己の人格の特色を直觀し體驗するものである。然るに、「我れ」といふ意識を伴ふものに千差萬別あるが、所謂實質的條件の相違に従つて大別すれば、没價值的と價值的、精神的と非精神的、個別的と普遍的、現實的と理想的等となる。

没價值的自我意識とは、「我れ」といふ意識の一切であり、價值的自我意識とは、所謂自覺で、單に我れを我れに識るだけではなくて、價值的な我れ即ち如何なる價値を有する我れであるかを識ることである。

精神的自我意識とは、精神的なもののみ、即ち知る我れ、感ずる我れ、意志する我れ又は性格等を自我と見るものであり、非精神的自我意識とは、身體又は物質を我れと見る自我意識である。そして、身體中心の非精神的自我意識にも全體のものとの部分的なものとの別がある。前者は、自己の身體全體又は生命全體を我れと見るものであり、後者は、顔面・手足・頭髮等を我れの中心と見るものである。物質中心の非精神的自我意識とは、衣服・居宅・財産等を中心とする自我意識である。

個別的自我意識とは、一個體を我れと見るものであり、普遍的自我意識とは、個體以上のもの即ち自己の家族・社會・國家等を我れと見るものである。

現實的自我意識とは、現在の我れのみを自我と見るものであり、理想的自我意識とは、あるべき我れを自我と見るものである。

但し、これらの區別は、勿論便宜的で、自我意識としては、何れも、人格の形式的・作用的・主觀的・經驗的方面に該當すると共に、具象的には彼此相交錯するものであることを忘れてはならない。

さて、以上の意味に於ける自我意識は、勿論、發達的のものであるが、其の成立發達の形式は辨證的である。即ち、自我意識は、始め、非我(他我をも含む)意識に即して成立し、次には、非我意識に對立し又は非我意識と抗争し非我意識を制壓して存在發達し、最後には、非我意識と協調し又は非我意識を包括して存在し發達するものである。これを他面より見れば、自我意識は、沒價値的より價値的に、非精神的より精神的に、個別的より普遍的に、現實的より理想的に發達して行くのである。

今自我意識成立發達の順序を具象的に觀察するに、其の成立の原因となるものは、第一は自己の身體である。そしてホールに從へば、(イ)手指、(ロ)足、(ハ)足趾、(ニ)膝、(ホ)耳、(ヘ)鼻、(ト)目、(チ)頭髮、(リ)齒、(ヌ)舌、(ル)足趾の爪の順序で、自己の身體を自我と見るのである。尤も幼兒は、此等を始めは自己以外の他物と見做し、次第に觸視兩覺の聯合其の他の經驗によつて自己の一部となるを知るに至るのである。これに次ぐものは體内の諸器官で、(イ)皮下の堅硬體としての骨を知り、(ロ)飽食腹痛等によつて胃を知り、(ハ)脈搏によつて心臓を知り、(ニ)呼吸によつて肺臓を知り、斯くして次第に我が身體なるものを自覺するやうになるのである。

因に、自我意識が發動する場合には一種獨得の身體運動が伴ふものである。例へば、思惟する際に、必ず頭腦と喉頭との間に一種獨得の肉體的活動感を感じたり、眼球の運動・顔面筋肉の伸張・口内に於ける發音作用の感じ、頭裏に於ける調節活動の感じ、及び呼吸・脈搏其の他有機感覺より成る一般感覺又は感情が必ず伴隨するが如きである。

第二は衣服で、(イ)一方では觸覺により、(ロ)他方では他人の認識稱讚により、自己の擴張を感じ、更に、(ハ)脱いだ我が衣服を見ることが亦自我意識を明かにする一因となる。第三は姿で、(イ)地上や壁上への投影により、(ロ)特に鏡面に對することにより、自我意識を發達させる。但し、これも、始は影を他物と思ひ、次第にそれが自己と同一であることを知るやうになるのである。

第四は他人に對する羞恥の感情である。そして(イ)始は本能的に羞恥を感じ、(ロ)次に無羞恥となり、(ハ)再び又自覺的に羞恥を感じるやうになる。第五は言語で、「我」といふ言葉で自分を呼ぶ時、始めて身體・衣服・姿等の以外に我があることを知るのである。第六に、所有慾が發動すると、自我意識は一層顯著有力となる。第七に、道徳意識殊に社會的・道徳意識、即ち同情・愛情・責任・義務・協同・競争・嫉妬等の發達、及び極端な事件・境遇、例へば近親の死とか友人の反對とか失敗・蹉跎とかいふやうな經驗を積むに従つて、自我意識は益々明白となり、やがて自己の本質長短と使命責任とを反省し認識するやうになつて、自我意識は其の頂點即ち嚴密な意味の「自覺」の境域に達するのである。

尚ボールドウィンに従へば、幼兒は生後二ヶ月で暗黒中に母又は乳母を辨別し、其の抱擁の工合や、撫でたり叩いたりする工合で、彼女等を理會し、且これに適應し、更に自ら手を動かす、物を握り、他人を蹴る等の動作をするに至り、他人の行爲を自ら模倣し、自己を内省して自己を認識するのである。そして此の時は他人の自我を認められた時よりも自己の中に緊張・抵抗・苦痛等の感を覺え、更に執意努力を爲すに至り、愈自我觀念が明白になるのである。斯くして主觀的内省的に得た自我觀念を、他人にも應用し、比論を以て他人も自己同様の精神作用を有するものであることを知るのである。

第三節 個性

個性(Individuality)にも諸多の意義があるが、先づこれを廣狹二義に別つことが出来る。廣義の個性とは、あらゆる存在又は事象を包括するもので、他から區別し得る特質を具へた一個の統一體の一切を意味し、狹義の個性とは、特に生物又は人間にのみ限るものであるが、これにも亦存在又は没價值體としての個性と價值體としての個性との區別と、個體を個性と見るものと類型を個性と見るものとの區別とがある。そして心理學上の個性は、勿論、狹義の個性即ち生物殊に人間の個性であると共に、主として存在としての個性であり、時としては價值としての個性を包含する場合もある。即ち、心理學上の個性とは、一個の生物特に一個の人間又は同種類の數個體が、自己のみ所有し、随つて自己を他のあらゆる個物から區別せしめる先天的並に後天的なそして客觀的實質的な特質である。随つて、個性は、人格よりは範圍が狭いと共に、其の客觀的實質的一面を形造るものであり、自ら、自我とは人格に於て對蹠的關係を有

するものである。

因に、心理學は、由來個人科學と稱されるだけ、個性を重要視してゐるが、而も嚴密な意味の個性が心理學の主題として取扱はれるやうになつたのは、前述の如く、寧ろ最近のことに屬する。

さて、上記の意味に於ける個性には諸多の方面があるが、これを先天的方面と後天的方面、個別的方面と普遍的方面、存在的方面と價值的方面、部分的方面(知情意其他)と全體の方面等に別つことが出来る。随つて個性を十分に理解するには、これらの諸方面を包括しなくてはならない。然るに、實際に行はれてゐる所謂「個性調査」について見るに、多くは一面的であるのは遺憾であるが、最近に於ては、教育界や實業界等からの眞摯な要求に應じて、其の調査も次第に完全に近づきつつある。

今參考までに、個性調査の實例を擧げて見れば、本研究の先驅者クレペリンは、心的作業の時間の遅速練習の效果の多少・感官印象・觀念・運動等を把持する力・新しき印象又は活動に對する感受性・疲労の度・疲労回復の度・睡眠の深度・外

界よりの妨害に對する抵抗力・妨害に慣れるに至る力を個性調査の項目とし、モイマンは、感受性に基づくもの・意識の時間的關係に基づくもの・感情的反動の精粗に關するもの・精神作用の生理的基礎に關するもの、を個性調査の項目としてゐる。

尙、個性の研究法は、勿論實驗法を主とするが、特に前記ビネー・シモンの創案に係る所謂テスト(Test)即ち「検査」法又は「調査」法が重視されるが、これには、意識其のものを直接に検査する直接法と、これを間接に検査する間接法(例へば、感覺の強度を刺戟の強度で測り、感情を脈搏や呼吸で測る如く、意識をその物理的原因又は結果即ち刺戟と身體的器官の活動とにより、間接に測定するもの)との別を始め、個別的検査法と集團的検査法・口答法と筆答法・年齢別法と性別法等諸多の區別がある。

最後に、廣義の個性即ち普遍的個性について見るに、これにも亦、團體的乃至集合的個性、即ち、空間時間に制約された意識の特色を個性と見るものと、特に類型(Type)即ち意識の各分野に於ける共通特色を個性と見るものとの別があ

る。そして前者の代表者は、日本魂とか、江戸子氣性とか、モダンガールとか、廢應ボーイとか、書生かたぎとか、町人根性とかいふやうなものである。

これに、對し、後者即ち、類型の代表者は、氣質の類型・注意の類型・記憶の類型・知覺の類型・想像の類型・思惟の類型・學習の類型等であり、就中最も有名なのは觀念型(Ideational types)であるが、これは改めて後文に述べることにする。

尙この點に關して一言すべきは、スーブランガーの所謂「生形式」(Lebensformen)である。スーブランガーの生形式は、其の文字の示唆するやうに、必ずしも意識の類型でもなく又必ずしも心理學的のものでもなくて、寧ろ倫理的意味に於ける人格又は生活の類型であるが、而も個性上の類型と見られないこともない。そしてスーブランガーの生形式とは、理論型・經濟型・審美型・社會型・勢力型・宗教型が即ちこれである。

第四節 性格

性格 (Character) にも諸多の意義があり、且一般には其の倫理的意義が最も重要視されてゐるが、其の場合には「品性」と呼ぶのを常とする。併しながら、心理學上の性格も、要するに「彫り込む」といふ意味のある「カラクテール」(Kharakter)といふ希臘語を語源とし、且意志又は情意の傾向を意味する點では、倫理學上の品性と其の揆を一にする。因に、此の語は、始め描寫押印の道具並に此の道具で造られた印刻印象を意味したが、紀元前五世紀にヘロドトスの著作では、其の意味が轉じて比喩的要素を加味し、道徳や文學の方面に使用されるやうになつた。アリストテレスの弟子テオフラストスの著と稱せられる「道徳的カラクテレース」では、人性論の意味に用ゐられてゐる。更に、アウグステイヌス以來、それに宗教的要素が附加され、中世紀一般を通じて洗禮・按手・僧職授任等の式後靈魂に刻印される不滅の精神的表徴記號の義に用ゐられ、今日に至つても尙カトリック教派の一術語となつてゐる。一六八七年に公にされ

たラ・ブルイエールの『テオフラストのカラクテール』といふ著述では、個人の比較的變化し易い状態に對比して其の比較的固定的な性質をば「性格」と解したが、これこそ今日の用語の始めである。

繰り返していふ。心理學上の性格は、意志的(及び感情的)素質を中心とする個人意識の先天的並に後天的特色である。随つてこれは、人格及び個性に對しては其の範圍が狭少であり、自我に對しては幾分實質的であると共に個別のであり、道徳的品性に對しては先天的要素が一層多大であり、更に、氣質をも包含するものである。尙最近に於ては、前述の如く、心理學を特に性格學と呼び、随つて性格を始ど意識や人格同様、廣義に解するものも少くないが、著者はこれに與しない。

さて、以上の意味に於ける性格を分類すれば、先驗的と經驗的となる。前者は、經驗的性格を可能ならしめる理念的普遍的な性格、即ち、心理哲學の意味の性格又は最も嚴密な意味の道徳的品性であり、後者は、經驗によつて獲得した事實的個別的な性格、即ち心理科學の意味の性格である。そして、後者は更に

形式上、強固な性格と薄弱な性格、意志作用の確實性の大小による分類、固定的性格と變化的性格、意志作用の可塑性の有無による分類、とに別ち、實質上、善性格と惡性格とをはじめ、勉強家となまけ者、正直者とうそつき、眞面目な人と不眞目な人、理想家・空想家と實行家・實際家等に別つことが出来る。

因に、情意の部分的、後天的傾向を性癖と稱する、潔癖とか酒癖とかいふのが即ちこれである。

第五節 氣質

氣質 (Temperament) は、生理的方面即ち刺激に對する反應の方面から見た感情的素質である。

氣質は、既に古代希臘の學者の注意を惹いたもので、ヒポクラテス (Hippokrates, 460—377, B. C.) の見解が氣質説の嚆矢と見られてゐる。即ち氏は、人體に於ける四種の液體、精しくは血液・膽汁・黑膽汁・粘液の何れが勝れるかによつて氣質が決定されるものであるとし、且これを火・水・風・土に擬した。併しながら、權威的の學説となつた氣質説は、希臘の醫學者にして哲學者であり、且其の醫學説は十六世紀迄唯一最高の權威であつたガレノス (Galenus, 130—210?) の見解である。即ち氏は、身體内の體液から氣質を分類し、多血質・膽汁質・神經質・粘液質とした。この説はヴントも繼紹したが、而も氏は氣質を永久的のものとは見ないで、寧ろ主として感情活動の強弱遲速による分類とし、更に、氣質は特殊の情緒を生ずる傾向を有するとした。以下、これらの見解を総合して四種の氣質

を説明することとする。但し、實際の人間は單に一つの氣質のみを有するものではなく、多くは混合型に屬する。

第一に多血質(Sanguine temperament)とは、刺戟に對する反應が速くて弱い氣質で、快的感情強く、快活で社交的で樂天的であるけれども、意志殊に忍耐力乏しく、舉動輕燥である。即ち、我儘で、むら氣で、感じ易く、激し易く、心移り易く、現在の刺戟に容易く動かされ易い。

第二に膽汁質(Choleric)とは、刺戟に對する反應が速くて強い氣質で、不快の感情に傾き、且激怒し易いけれども、意志強く、勇往果斷の氣象に富み、舉動活潑、精氣充實し、目前の客觀的事象を能く處理するが、一面意地が悪い。實務家や政治家等即ち有能な活動家に最も多く見る氣質である。

第三に神經質又は憂鬱質(Melancholic)とは、刺戟に對する反應は遅いけれども強い氣質で、主觀的に感ずることが強く、且長く同一感情に支配され、隨つて行動を外面に現すよりは内觀的瞑想的で、孤獨を樂しみ、集團生活を好まず、自ら主我的・主觀的であり、且憂鬱にして悲觀的であると共に、未來的理想的乃至

空想的であるのを常とする。但し、觀察が緻密で智力に秀でるから、古來天才殊に藝術的方面の天才と稱せられるものに此の氣質に屬するものが多い。

第四に粘液質(Phlegmatic)とは、刺戟に對する反應が遅くて弱い氣質で、快の感情に傾くけれども活氣熱心に乏しく、舉動が緩慢である。即ち、心情が冷靜で事に當つて動ぜず、且辛棒が強く、一度定めた目的は必ず達成しようとするのが特色である。尙此の氣質を有するものには、利己主義者や冷淡家や頑固者や平然たる實行家が多い。

これを要するに、多血質は陽氣であり、膽汁質は剛氣であり、神經質は陰氣であり、粘液質は平氣であると稱することが出来る。

以上の氣質の差は、單に個人間に存在するばかりでなく、更に年齢上にも見られる。即ち、概して、幼年期は多血質であり、青少年期は神經質であり、壯年期は膽汁質であり、老年期は粘液質である。尙女子には多血質と粘液質とが多し。そして此の點から見れば、氣質は必ずしも固定的だといふことが出来な

第六節 智能

智能 (Intelligence) とは、廣義には、智的性能即ち理知を中心とする意識の先天的にして個人的並に團體的な特質であり、狹義には、稍高等な、即ち感覺を除いた理知を中心とするものである。

但し、智能が先天的だといつても、それには一代的のものと數代的即ち遺傳的のものとの別があり、而も其の差異は必ずしもそれ程明白ではないが、大體に於て遺傳が優勢である。そして智能の遺傳に對する父母の生殖細胞の價値は略同等で、寧ろ母(殊に母の女子に對する遺傳力)の方が多少優位を占めてゐる。更に、同一の両親から生れた兄弟姉妹の間にも、其の智能に種々の差別があることも亦否み難き事實である。そして、ゴールトン等の研究に従へば、其の調査した八十對即ち百六十人の雙生兒中二十對までは其の智能が全く異つてゐる。又第一子が比較的両親又は祖父母の缺點を遺傳し易く、且溫和であるが、時として異常に卓越した偉材が現れることがあり、第二子に偉人が

最も多く、第三子はこれに次ぎ末子またこれに次ぎ、獨り子は最後に位する。そして智能卓越者の生母には所謂賢母が多いと共に、その生産年齢は二十四歳及び二十八歳が最も多い。尙智能は必ずしも先天的に限らないことは、環境の影響が強大である點に徴しても明かである。

更にこれを他面より見れば、遺傳性の最も多いものは音楽で、これに次ぐのは繪畫である。そして遺傳性の發動出現に於ても、リボーに従へば、音楽が最も早く、繪畫・文學・學問等がこれに次ぎ、そして大凡三歳から七歳までの間に其の發動が開始されるのである。

尙、智能の優劣は年齢に關係あるが、必ずしも普通の年齢即ち曆(生存)年齢 (Chronological age) と平行するものではないので、別に心年齢 (Mental age) なるものによつて、智能の發達程度を測定するのである。心年齢とは、意識(主に智能)の程度を、年齢といふ單位で現した一種の評價數値である。例へば、曆年齢八歳の甲なる兒童が、八歳級の精神検査問題に全部合格し、且九歳級の四問題中二問題に合格し、十歳級の四問題中一問題に合格し、十一歳級の四問題は全部不合

格であつたとすれば、この兒童の心年齢は $\frac{8}{4} + \frac{1}{4} = \frac{8.25}{4}$ 即ち八歳九ヶ月となるのである。そして暦年齢を以て心年齢を除した商に 100 を乗じたものは

$$\text{智能率 (Intelligence quotient = I. Q.)} = \frac{\text{心年齢}}{\text{暦年齢}} \times 100$$

随つて前記甲の暦年齢を八歳二ヶ月とすれば其の智能率は左の如くである。

$$\text{甲の智能率 (I. Q.)} = \frac{8\text{歳}9\text{月}}{8\text{歳}2\text{月}} \times 100 = 107$$

智能検査法の案出者ビネーの方法を改訂して今日模範的検査法と見られてゐる、米國のスタンフォード式智能検査法の結果から定められた智能の段階は左の如くである。

- (一) 天才……………智能率、一四〇以上
- (二) 最上智……………同上、一二〇—一四〇
- (三) 上智……………同上、一〇〇—一二〇
- (四) 平均智……………同上、九〇—一〇〇

(五) 劣等……………同上、八〇—九〇
 (六) 低能……………同上、七〇—八〇
 (七) 精神薄弱……………同上、二五—七〇
 (八) 白痴……………同上、二五以下

この智能の段階については種々の異説があるが、大體、智能率一〇〇以上は常凡より優れ、一〇〇以下は常凡より劣ると見てよいのである。尙、智能段階の名稱にも異説がある。智能研究の權威者ターマン(Terman)は左の九段階に分けてゐる。

- (a) Idiot (白痴) (b) Imbecile (痴愚) (c) Moron (モロン)
- (d) Border-line deficiency (境界線級缺陷—愚鈍) (e) Dullness (遲鈍)
- (f) Normal intelligence (正常智) (g) Superior i. (上智)
- (h) Very superior i. (最上智—秀才) (i) "Near" genius or genius (准天才又は天才)

因に、「モロン」とは成人に達するも、心年齢は大抵九歳乃至十歳で、優れたものでも十一歳以上に達することが稀であり、随つて其の智能率は五〇乃至七〇



又は七五の間にあるものを指すのである。

著者は、智能の段階を白痴・愚鈍・低能・正常(凡庸)・優良・顯(秀)才・天才に七分し、低能以下を低能者・優良以上を高能者とし、且兩者を合せて異常者とし、これを正常者に對比させるものである。尙これを學校に於ける成績の評語によつて現せば左の如くにしたがひたい。——甲上(天才)——九〇點以上・甲(顯才)——八〇乃至九〇・乙(上)優良——七〇乃至八〇・乙(正常)——五〇乃至七〇・丙(低能)——四〇乃至五〇・丁(愚鈍及び白痴)四〇點以下)

更に、これを上記の三分法に當て嵌めて、優等者(優良者以上)・普通者・劣等者(低能者以下)と呼びたい。但し、優等者及び劣等者の智能に關しては、改めて後文「異常意識」の章に於て再述することとする。

(以上は、一般智能の段階であるが、この他特殊智能の段階もある。例へば、記憶・聯想・推理等であるが、これは後文にゆづることとする。

次に、狹義の智能は、主として想像と思惟とより成るが、記憶も亦これに對して相當に重大な役割を持つてゐる。隨つてこの三者が結合の仕方によつて

智能の類型に相違を生ずるのである。

これを詳言するに、先づ記憶の素質は、聯想型と統覺型と天才型とに別つことが出来る。聯想型とは、過去のことを想ひ出したり或は色々のことを考へたりする時、感覺を主とするものであるが、これにも亦視覺型・聽覺型・運動型・混合型等の別があるが、詳細は後文(記憶及び觀念の項に於て)に再述することとする。尙此の記憶型が最も著しく且有効に發現するのは數學的天才に於てである。統覺型とは、始めに物を知覺する時に注意を用ゐる結果、其の内容が一個の結合體即ち體系を成し、隨つて容易に正確に想ひ出すことの出来る素質である。天才型とは、聯想及び統覺型を基礎にして素材を處置する際、其の處置が非常に敏捷迅速な素質である。

次に、思惟又は理會の素質は、歸納的と演繹的とに別つことが出来る。歸納的思惟(理會)型とは、個別又は實際から出發して普遍又は理論に到達するものであり、演繹的思惟(理會)型とは、反對に、普遍又は理論から出發して個別又は實際に到達するものである。

最後に想像型について見るに、これにも直觀的と結合的との別がある。直觀的想像型とは、比較的に受動的な想像型で、視覺や聽覺を通し、外から素材が入つて來て顯著な印象を意識に與へ、且それが主となつて想像作用を起す素質であり、結合的想像型とは、比較的に發動的な想像型で、素材を外部より受容しながら、而も其の結合に改造を施して或新しい形式とする素質である。但し、以上の智能は、具象的實際的には混合又は結合して作用するものである。そしてヴントは、狹義の智能を、想像と思惟との區別を組み立てて左の四種とした。

- (一) 觀察的智能。直觀的想像と歸納的思惟とに併せ長じ、事物を緻密に觀察し考究することに適するもので、博物學者の智能が其の代表者である。
- (二) 發明的智能。構成的想像と歸納的思惟とに併せ長じ、事實を結合し、且件の結合から漸次原理的な方面に進む結果、これまで不明であつた部分を明かにし、これまで看過して置いた部分を發見し、これまで無かつたものを發明するやうな智能で、發明家の智能が其の代表者である。

- (三) 分析的智能。直觀的想像と演繹的推理とに併せ長じ、事物の構成要素が如何なるものであるかを精密に考究することに適するもので、幾何學者の智能が其の代表者である。
- (四) 思辨的智能。構成的想像と演繹的思惟とに併せ長じ、物事を深く考へることに適する智能で、哲學者の智能が其の代表者である。
- 因に、分析的智能と發明的智能、又は觀察的智能と思辨的智能とは結合することが困難である。



第七節 注意

注意(Attention)の心理學上の地位は必ずしも一定してゐない。即ち、或はこれを意識の根本原理と見たり、或はこれを意志の一作用と見たり、或はこれを理知作用と見たりするが、著者はこれら三見解を折衷して、意志を主動力とし、理知を副動力とする意識の全體作用と見るものである。注意とは、畢竟、對象(超越的對象及び内在的對象)を明かに認識せんがために、特に(自覺的又は超自覺的に)意識を、認識せんとする對象に向つて集注する作用であり、そして對象を明かに認識しようとするのは、注意の目的であると共に、意的(形式)にして知的(實質)な作用であり、特に意識を對象に向つて集注するのは手段であると共に、意的作用だからである。斯くして、注意の本質を闡明するには、手段又は動因としての集注作用と、目的又は結果としての明識作用との兩面を検討しなくてはならない。

第一に、前者即ち集注作用について見るに、これはいはば注意の主觀的方面であり、緊張と抑制とを兩面とする選擇作用である。即ち、多數あり得る對象中、只一つのみを選んで爾餘の對象を抑制する作用である。更に別言すれば、注意は、後文に再述するやうに、不注意と表裏するものである。そしてこの方面は、筋肉の緊張感覺と意志の特色たる活動感情とを伴ふのを常とする。尙、集注作用は一定時間持續することが必要である。

第二に、後者即ち明識作用について見るに、これはいはば注意の客觀的方面であるが、或對象を識野の中心に持來することによつて可能である。そして識野とは、前にも一言したやうに、或瞬間に於ける顯在意識の全範圍で、其の中心は極めて明瞭であり、周圍に至るに従つて次第に不明瞭となるものである。そして集注が強くなればなる程明識の範圍は狭小になるのである。但し、意識は流續體で、嚴密には一刹那と雖も同一状態を保たないものであるが故に、識野に於ける中心と圓周とは斷えず動搖し、隨つて注意も亦動搖を免れることが出来ないのである。そして其の動搖の時間は、對象の性質又は意識の状態によつて異なるが、大抵二・三秒で動搖する。(例、同一物を長く凝視し

てゐると別なものに見え、懐中時計を漸く音を聞き得る距離まで離して其の音を傾聴すると、聞えたり聞えなかつたりする。随つて同一事物に對して注意を永く持續するには、斷えず其の事物の新方面に着眼することが必要である。さうでなければ、同一事物に永く注意したつもりで實は全く別な事物に注意することとなるのである。

尙注意の動搖の原因については、筋肉疲勞説や腦細胞疲勞説等種々の異説があるが、結局は不明である。只動搖が週期的なことだけは明瞭である。

次に注意の條件について見るに、先づ客觀的及び主觀的に二分することが出来る。客觀的條件とは、要するに刺戟である。そしてそれは(イ)刺戟の分量(即ち刺戟の大小・長短で、大きな看板や長い音は注意を惹起し易い。但し、過度に大きなものは必ずしもさうではない)、(ロ)刺戟の強度(刺戟の強弱で、高い音や輝く色等が注意を惹き易い。但し、過度に強い刺戟は一時的の注意を惹くだけで、永續はしない)、(ハ)刺戟の變化(刺戟が強大でも變化がなければ注意を惹かない。例へば、時計の音が長く續けば氣がつかず、却つて停止した際に氣

がつき、廻轉式・明滅式の電氣廣告が特に注意を惹くが如き即ちこれである。屢々繰り返されるものが注意を惹くのも同一理である。)(ニ)新奇な刺戟又は急激な刺戟(即ち見慣れ聞き慣れないものが特に注意を惹くのである。)(ホ)意識に現れる時間的順序(が先なものが特に注意を惹く)、(ヘ)對比的な刺戟などである。

注意の主觀的條件とは、意識の性質又は狀態で、注意者の先天性・過去の經驗及び現在の心狀を包含する。そしてそれは更に、(イ)先天的條件(即ち神經組織の遺傳的特質の相違で、例へば、音樂的素質に富むものは聽覺的注意が鋭いと云ふ如き)、(ロ)刺戟と合致する表象の有無(例へば、待ち設けた家人の足音が特に注意を惹く如き)、(ハ)感興が伴ふか否か(學者が自己の専門のことに特に注意し、美装せる婦人が他の婦人の服裝に特に注意する如き)、(ニ)責任感・將來の利害・快苦の豫想、(ホ)趣味嗜好に適するか否か等の諸條件を包含する。

注意は、以上の諸條件の如何により、其の範圍又は域を異にする。そして其の範圍が廣ければ内容が不明であり、範圍が狭ければ内容が明瞭であると共

に、過去に經驗したことのあつたものは、記憶も伴ふために、範圍が廣いのが通則である。但し、それが對象によつて異なるのは、例へば、有意義綴字は無意味綴字の三倍を注意し得ることに徴しても明かである。

これを具象的にいへば、第一に、聽覺では、調子及び高さを等しくする音を續發した際に數へることなくして其の數を知り得る程度が、聽覺的注意の範圍である。そして時計の音の如きは、一秒間に三回乃至五回の速さで發する音の四乃至五が注意の範圍である。但し、一秒六回以上の音は其の數を知り得ないのは呼鈴の例でも明瞭だが、これと共に、音と音との距離が四秒以上に互る時には、一音以上を注意の一緊張内に收容することが出來ないのは、例へば入相の鐘の音の如くである。尙音に律を附する時には、さうでない場合よりも注意の範圍が廣大であることは、例へば一つ置又は二つ置に強音又は弱音を挿入するが如き場合に經驗することが出来る。

第二に、觸覺に於ては、數個の小物體を指先で觸り、その數を數へないで知り得る範圍は六個である。盲人の用ふる點字が内外共六點の配列を以て基本

形式としてゐるのが、其の證據である。

第三に、視覺に於ては、簡單な圖形(點・圓・三角等)又は無意味な文字の組合せは、四・五又は練習によつては六まで一時に認めることが出来る。有意義綴字と無意味綴字との範圍の差は既に一言した通りである。

尙注意の範圍は、以上の他種々の條件によつて變化する。即ち、先づ(イ)年齢と共に其の範圍が擴大される。兒童は一物體の各部分の一つ宛分離して見るとのみで、各部分に對して同時に注意を向けることが出來ない。兒童畫が大抵各部分の不均衡を來す所以である。事實、大人がア・イ・ウ・エ・オの五音を一度に注意し得る場合にも、小兒(三歳以下)はウ・エ・オを注意する際にア・イの部が既に注意の範圍外に逸し去るのを常とする。次に(ロ)練習即ち教育や修養や經驗によつて其の範圍が擴大される。例へば、讀書の際始めは拾ひ讀みするが後には數行並び下るが如きである。次に(ハ)刺激多き境遇にあるものが注意の範圍も擴大されることは、都會人の注意が田舎人のそれに優るが如きである。

次に、注意の種類について見るに、第一の分類は、有意注意と無意注意と反意注意との別である。

(イ)有意注意 (Voluntary attention) とは、典型的な注意で、自覺的に即ち自ら進み自ら努力して、自己の意識を對象に向ける作用、即ち教師の講義に注意する如きもので、努力感が伴ふのを特色とする。これは發動注意 (Active a.) ともいひ、又將に起らんとする事象を期待する時には豫期注意 (Expectant a.) とも呼ばれる。(ハ)無意注意 (Nonvoluntary a.) とは、自覺も努力もなくして自らはれる注意、即ち興味あるものに對する注意である。これは又、受動注意 (Passive a.) とも反射注意 (Reflex a.) とも乃至は自發注意 (Spontaneous a.) ともいはれる。尙、其の始め有意注意であつたものが、練習の結果努力感を失ひ、終に自然に注意するやうになつた場合のものは、第二次自發注意 (Secondary spontaneous a.) ともいはれてゐる。(ニ)反意注意 (Involuntary a.) とは、或對象に注意してゐる際にけたたましい悲鳴を聞くと、到底前者に注意することが出来なくて、後者に注意せざるを得ないやうな注意で、俗に「氣にかかる」といはれるものである。因に、有意注意と無意注意との

別は相對的で、前者が後者となり、後者が又前者となるのである。

第二の分類は、感覺的注意と觀念的注意との別である。(イ)感覺的注意 (Sensory a.) とは、感覺的對象への注意であり、(ニ)觀念的注意 (Ideational a.) とは、觀念的對象への注意である。

第三の分類は、直接注意と間接注意とである。(イ)直接注意 (Immediate a.) とは、對象其のものに直接興味を感じてする注意であり、(ニ)間接注意 (Derived a.) とは、對象其のものには直接興味を感じないが、これに關係ある事象の有する興味のためにする注意である。そして有意注意は皆間接注意であるが、無意注意、感覺的注意は直接的なことも間接的なこともある。刺戟の性質が強大であるか、又は本能的興奮性のものである時には、直接的であるが、刺戟の性質が過去の經驗によつて或興味ある内容と聯關する時には、刺戟其のものは平凡で注意を惹くに足らないが、注意の對象となる時には、勿論間接的である。無意的觀念的注意にも直接的と間接的との別がある。注意の對象其のものに興味があるか、又は興奮性がある時には、直接に注意し、他の目的を達する手段と

してのみ興味を感じる時には、間接的に注意するのである。

序に一言すべきは興味(Interest)についてである。世には興味を以て注意の條件と見るものも少なくないが興味は寧ろ注意の一状態又は一種類である。即ち快感の加はつた注意が興味である。随つて興味が強ければ注意は益々深くなり、注意が深ければ興味は益々強くなるのである。

尙反意注意のやうに、快感を伴はなくても深い注意は關心と呼ばれる。

翻つて思ふに、意識が身體と密接な關係を有することは既に一言した通であるが、注意も亦身體と密接な關係を有するのである。先づ、感覺的注意と生理作用との關係について見るに、感覺的注意は必ず著しい感覺運動を伴ふのである。そして件の感覺運動は率ね調節的性質を有し、外來の刺戟を最も明瞭に印象させるやうに收縮する。例へば、視覺的注意の場合には、眼筋の收縮によつて眼球を廻轉し、刺戟を中央小窩に來らしめ、水晶體の毛様筋の收縮によつて調節を行はしめ、以て映像を網膜上に結ばしめるが如きである。聽覺的注意の場合には、音を聞くに適した方面に頭部を廻轉せしめようとし、味覺

的注意の場合には、刺戟を強く又明かならしめるために舌を動して食物を壓し、嗅覺的注意の場合には、空氣を強く吸入せんとし、觸覺的注意の場合には、觸れた部分を動かすが如き即ちこれである。尙或刺戟を受ける時には、其の刺戟を生ずるに必要な運動を繰返さうとする傾向を生ずるのである。例へば、自動記器を用ひて腕の運動を描寫させる場合に、三角形の如き簡単な圖形を描いて見せると、これに注意してゐる被験者は其の運動を繰返さうとする傾向を示し、略三角に似た形を煤紙上に描くが如きである。相撲見物に身が入つた時に模擬運動を行ふ如きも、亦注意の一特色である。

觀念的注意に於ては、注意を集注するに最も都合のよい様に感覺器官及び體軀の筋肉に運動を生ずる。例へば、記憶を喚起する際には眼を閉ぢたり或一點を凝視したりする如き、默想に耽る時には頭部を垂れたり腕を組んだり額に手を當てたりするが如きである。更に感覺的注意の場合と同様、地圖を見て獨逸を想ひ起す時には眼球を上(西)方に轉じたり、句を想ひ浮べようとする時には空氣を強く吸入したり、或は、味覺に於て、觀念的注意のみで舌を動か

し唾液を分泌するが如き、即ちこれである。

此の他、兩者を通じて、注意には、隨意筋の收縮(皺顎の筋肉の收縮拳を握る等)や、不用な運動の禁止(演説や音楽や芝居が佳境に入つた時に觀聽者が非常に靜肅にする如き)等の消極的生理作用も伴ふのである。

注意は又呼吸や血行とも密接な關係がある。即ち、注意が著しく緊張する時には、呼吸は一時停止し、然らざる場合でも、一時淺く——遅くて弱くなり、而も吸氣よりも呼氣が長くなる。脈搏は、感覺的有意注意では遅くなり、觀念的有意注意では速くなるのを常とする。瞳孔散大し、涙液分泌し、眼がかがやくのも一特色である。

これを他の精神作用との關係について見るに、注意は、先づ意志決定に與つて力がある。即ち、或動機に注意する時には、それが優勢となつて他の諸動機を征服するのである。そして反對の動機がなければ注意は直ちに動作を支配するのである。次に、注意は理知作用を助長する。穎才と鈍才との別は注意力の強弱にあるとさへいふことが出来る。そしてこれは殊に記憶に於て、

さうである。即ち、注意は記憶を明確にする重大な條件であるが、これは改めて後文記憶の項に於て再述することとする。

次に、注意も亦發達する。そして無意注意より有意注意に、感覺的注意より觀念的注意に、間接的注意より直接的注意に進むのが、注意發達の通則である。別言すれば、始は客觀的條件に基づく反意注意と遺傳に基づく無意注意とが働き、やがて過去の經驗に基づく無意注意發達し、最後に義務感より生ずる有意注意が作用する。そして嬰兒の注意は純無意的である。其の有意注意は新しい對象に順應し難く、疲勞し易く、注意の範圍が狭く、注意の分配作用が拙であり、更に隨伴生理作用(手足を動かしたり筋肉を收縮したり)が多いのを常とする。そして兒童が發達するに従ひ、一時に注意し得る範圍が次第に擴大し、且注意に伴ふ生理作用が次等に減少する。尙注意が固定する時期には、異説があるが、メスマーに従へば、十一歳であり、モイマンに依れば六・七歳である。次に、注意の障礙について見るに、鈍麻・制止・轉動性・昂進・羈縛等を擧げることが出来る。(イ)注意の鈍麻とは精神力が減退して一般に痴呆状態に陥る時に

起るもので、知覺が生じても内的經驗に何等の結合も起すことなく、随つて自己の意志で周囲の出來事を追求することが出來ないもの、例へば、麻痺性痴呆患者が周圍に起つた驚くべき事項に對して平然たる如きである。(ロ)注意の制止とは、精神内部に連絡を生ぜしめようとするも其の作用が困難なために注意を缺くものであつて、恢復が可能である。燥鬱病者の昏迷状態の如き即ちこれである。(ハ)注意轉動性昂進とは、内外の動因によつて注意が容易に變轉し易き状態である。そしてこれは注意が淺浮で、變換し易いために、確乎たる連絡による意識現象を構成し得ないのである。疲勞や注意散漫は其の輕度なものである。(ニ)注意の羈縛とは、内外の原因によつて注意が必要なきに至るも尙單に一方に傾き、他の知覺作用が不能となることである。憂鬱患者が只悲觀的觀念にのみ拘泥して外界の知覺に注意しない如きが其の一例であるが、多くの譫忘性或は昏迷性状態に於て其の鮮かな幻覺又は空想に精神を傾注して外界の理會を缺く如きである。

最後に、不注意について一言する。既に述べたやうに、注意は不注意(*dispersed*)

a. or absent-mindedness)を其の消極的一特質又は一條件とする。注意は意識の中心部を意味するが故に、不注意は、意識の中心部以外を指す。別言すれば、或對象に不注意だとは、其の對象以外の對象に注意が向けられたことである。随つて不注意は消極的状态即ち無注意ではなくて他。注意の状である。そしてこれは更に注意散漫と注意分配とに別つことが出来る。注意散漫とは、注意が久しく一事に停滞せず絶えず新方面に移つて一事も十分に意識されることなき状態で、無意注意や反意注意の強きもの、子供や病人などに多い。注意分配とは、有意の作用によつて故意に起されるもので、一時に二つ以上のことに注意を向けることである。不注意が極端になつたものを放心といひ、其の反對の方面を専心といひ、専心に熱情が伴ふ時には熱心又は熱中といひ、それが度を越えれば熱狂といひ、更に兩者の混合状態即ち意識の焦點の移動が一時困難になつた状態は放心専心である。尙上記の説明から見ても明かなやうに、絶對的の不注意といふものがないと共に、不注意は一般に考へられるやうに凡て有害なものではないである。

昭和六年九月廿八日印刷
昭和六年十月三日發行

專門部政治科用

定價 壹圓八拾錢



著者 稻毛金七

東京市牛込區早稻田鶴町四三六

發行者 拔井峰吉

東京市牛込區早稻田鶴卷町〇四五

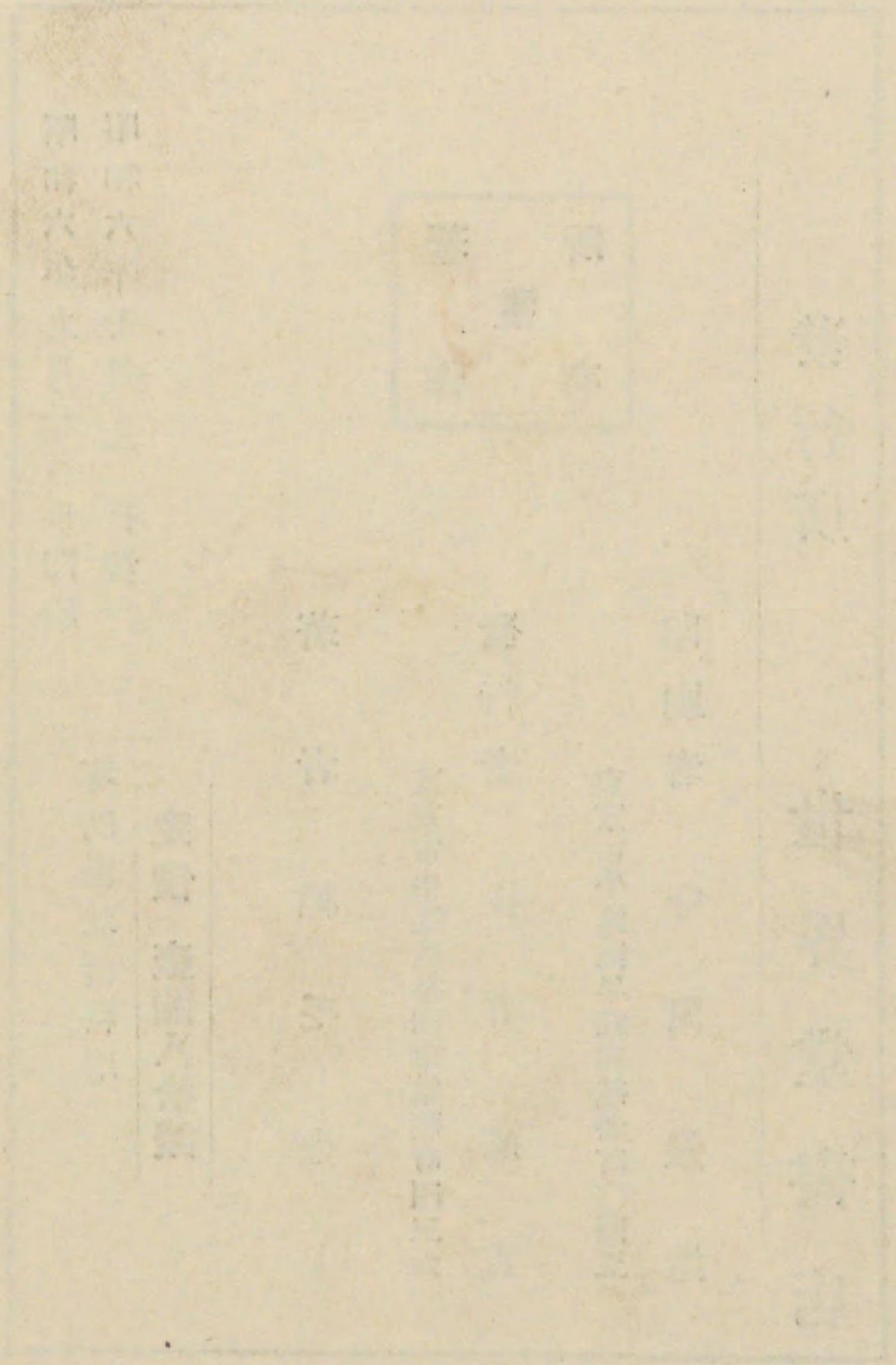
印刷者 守田銀造

發行所

世界堂書店

①
△
X

—
◎
△
X



—
①
△
X

1850

①
△
X

552
321

⑨
△
X

